

松江バンドの歴史と信仰

—日本におけるバックストンの教会史的意義—

工藤弘雄(関西聖書神学校)

はじめに

1)人物点描。キリスト教大事典。新キリスト教辞典。キリスト教人名辞典。日本キリスト教歴史大事典。オックスフォード・キリスト教事典。(土肥昭夫、由木康、工藤弘雄ら執筆)土肥はバックストンを「松江バンドを育成……福音主義の伝統を受け、魂の覚醒と聖潔の意義を説き、無教派主義に立つ伝道を行い、その成果で日本の純福音派の最大の源流のひとつとなった」と評価。由木はウィルクスの項で「教会制度にしばられず、日本人と外人がひとつとなって祈りと伝道に励む超教派的の団体が必要であることを感じ、日本伝道隊を組織」と評価している。The oxford Dictionary of the Christian Church ではウィルクスを“Here he formed the idea of a Japanese (正しくは Japan) Evangelistic Band (J.E.B.)which,free of ecclesiastical organization,would be directed towards aggressive evangelism and the spread of scriptural holiness”と評価している。

2)バックストンについての言及。最近の書物から。『日本の説教』(日本キリスト教団出版局)「監修者のことば」。加藤常昭他。

3)視点。日本初期プロテスタンティズム3バンド—横浜・熊本・札幌—と松江バンドの連続性と非連続性。人格的聖化と宣教の動力としての聖化運動。

4)バックストンの著書は発題の中で随時紹介。

5)主な参考文献。

B・G・バックストン、小島伊助訳『信仰の報酬』(バックストン記念霊公会、1958年)

小島伊助『小島伊助全集』(1-9巻、いのちのことば社、1983-1984年)

都田恒太郎『バックストンとその弟子たち』(バックストン記念聖会、1968年)

日本キリスト教史に関する諸文献における言及。柳田・大内・土肥・中村。特に中村敏のものは総括的に良くまとめられている。

1. バックストンとその時代

1) 時代的背景

「偉大な世紀」(ラトーレット)。19世紀信仰覚醒運動。

第1波 1792年頃から。英国を中心に。英国国教会ほかメソジスト、バプテスト、会衆派諸教会に。特にClapham Sectと呼ばれる上層階級に属する国教会の福音主義者たち(Anglican Evangelicals)は中心勢力。J.Venn、Z.Macaulay、W.Wilberforceなど。ウイルバーフォース(1759-1833)は奴隷解放運動家。バックストン卿と共に働く。ウエスレーの書簡の最後は彼に宛てられたもの。英国海外聖書協会ははじめ、いくつかの海外宣教団体設立。CMS (Church Missionary Society)も1799年に設立される。Eugene StockのThe History of the Church Missionary Society. (C.M.S,London)にはC.M.S.に所属したB.F. バックストンの日本各地における聖化運動の永続的祝福が評価されている。(同書、355頁)

第2波 英国では国教会の教義・伝統・目に見える礼典を重視する高教会運動（オックスフォード運動）に対抗して福音主義運動。ケンブリッジはその中心勢力。1846年、ロンドンにて福音同盟会設立。福音同盟会の「九箇条」の信仰基準は福音主義の最大公約数。日本の初期プロテスタンティズムと福音同盟会の関わりは深い。福音同盟会の呼びかけるよる初週祈祷会の開催、リバイバルへ。1872年、日本で最初のプロテスタント教会「日本基督公会」が横浜に設立。信仰箇条は「九箇条」からの翻訳。なお、Evangelical Allianceの「9箇条」は〈1〉聖書の神的靈感、権威、充全性。〈2〉聖書の個人的解釈の権利と義務。〈3〉唯一の神と三位一体性。〈4〉陥罪による人間の全的墮落性。〈5〉神の御子の受肉、人類の贖罪のみ業、仲保者としての執り成しと支配。〈6〉信仰のみによる罪人の義認。〈7〉罪人の回心と聖化における聖霊の働き。〈8〉靈魂の不死、肉体の復活、義しき者への永遠の祝福と悪しき者への永遠の刑罰を伴うイエス・キリストによる世の審判。〈9〉キリスト教宣教の神的命令、バプテスマと主の晩餐の制定の権威と永続性。

第3波 1858-59 リバイバル。「キリスト教史上最も顕著な霊的運動」（E.Orr）。ニューヨークのフルトン街における正午祈祷会が発端。「二階座敷的祈祷とペンテコステ説教」。全米、全英、ヨーロッパ各地に波及。国内宣教、海外宣教、ホーリネス運動活発。ウィリアム・ブースの救世軍、ハドソン・テーラーの中国奥地宣教会、ムーデイの伝道など、ホーリネス信仰と深い関わりを持つ。バックストンは1860年誕生。なお、この時代Cambridge Inter-Collegiate Christian Union, Oxford Inter-Collegiate Christian Union (C.I.C.C.U. O.I.C.C.U と呼ばれる) が起こされる。バックストンもウィルクスもこれらに属する。ちなみに、J.C.Pollock著 A Cambridge Movementにはバックストンや彼の子息らのC.I.C.C.Uとの関係が記されている。（同書202頁）

2) バックストンの信仰的ルーツ（根元）

① トーマス・フォーエル・バックストン卿 Sir.Thomas Fowell Buxton

古くからバックストン家の標語は「汝力を尽くしてこれをなせ」（伝道の書9:10）。今でもイスニーの旧バックストン邸（現 All Nations Christian College）には DO IT WITH THY MIGHT の聖句が刻まれている。バックストン卿はパークレーの父方の祖父。1813年、27歳で回心。やがてウイルバークフォースと共に奴隷解放運動に邁進。1833年、イザヤ58章6、11節に立ち、英国議会下院にて大討論、奴隷制度全廃を勝ち取る。（『信仰の報酬』25、26頁）英国内外聖書協会の初代委員、ロンドン・シティ・ミッションの会計、CMSの会計。ロンドンのウエストミンスター寺院に埋葬。サムエル・スマイルズの『自助論』（竹内均訳、三笠書房、1985年。Self-Help は明治時代、中村正直による日本語訳が『西国立志扁』として出版）では「意志の活力」の章において、特に「旺盛な活力と不屈の意志に満ちて」の実例としてバックストン卿が取り上げられている。（同書、86、89、100-104頁）。

② エリザベス・フライ Elizabeth Fry (1780-1845)

社会事業に献身。ニューゲート刑務所改良。特に婦人受刑者のために尽力。各地の刑務所改善ばかりでなく、他の困窮者のためにも心を砕く。王室とも深い関わり。一切の事業を徹底した信仰の立場で行った。（『キリスト教大事典』教文館、917頁）フライは熱心なクウェーカー教徒。クウェーカー族のガーニー家の出身。パークレー・バックストンの母

ラケル・ジェーン・ガーニーもこの一族の出身。なお、「解放者」バックストン卿夫人ハンナの姉がエリザベス・フライ。バックストン家は父方が福音主義に立つ国教会（低教会）信徒、母方はピューリタンの流れにあるクエーカー教徒。なお、バックストン家の詳細な家系図はエレン・クレイトン編・岩井サヤカ訳『エレン・バックストンの日記』（一粒社、1996年、VII、VIII頁）を参照。エレンはバークレーの長姉。

③バークレーという名前

「バークレー」の名前はクエーカー教徒デビッド・バークレーやロバート・バークレーから由来。（『信仰の報酬』27-30頁）ロバート・バークレーをグレートハウスは、クエーカー教徒の公的神学者であり、バランスのとれたキリスト者の完全の教理の主張者であると紹介している。（ウィリアム・グレイトハウス著、大江・竿代・小出訳『ウエスレー神学の源流』福音文書刊行会、1980年、182、183頁）バークレーは「死と罪の体の磔殺」を語る。なお、バックストンの高弟の一人澤村五郎は保守的なピューリタン、ウィリアム・デルのガラテヤ書2章20節からの説教「死して甦りしクリスチャン」（The Crucified and Cuickened Christian）をきっかけに明確な聖化の体験を得た。後に澤村はこれを翻訳。最近、1773年、ロンドンで発行された古書、Select Works of William Dellを入手。日本伝道隊の流れの中にウエスレーとともにピューリタンのSpiritualityの影響を受けていたことが伺われる。ゴッドフリーは「バークレー」をクエーカーのSpiritualityと結びつけて記している。「それ故に『バークレー』とはある意味に於て予言的の名であった。真理を直接に聖書に求め、神の御霊を受け、御霊に支えられて聖き生涯を宣伝する為に召された者に冠せられるべき名であった」（『信仰の報酬』30頁）。

3)バックストンの周辺—その生い育った土壌—

①幼少時代 1860年8月16日誕生。父トーマス・フォーエル・バックストン。クリスチャン実業家。母ラケル・ジェーン。「エレン・バックストンの日記」は1860年1月17日、エレンの11歳の誕生日から4年間、本人が描いたスケッチを加えて記されている。30人を越す大家族そろっての礼拝出席や毎朝の聖書の集いなど当時の福音的な英国国教会の信仰生活の中でバークレーは育った。ハロー校で学ぶ。『信仰の報酬』31、33頁。

②ケンブリッジ時代 1879年、ケンブリッジの三一カレッジへ。ローン・テニスのオックスフォードとの選手権では後の英国外相エドワード・グレイと対戦。C.I.C.C.Uに所属。祈祷会、伝道会に関与。C.T.スタッドとバックストンの関係は深い。クリケットの世界的プレーヤースタッドは救霊の経験において「クリケットよりもおもしろいものを発見」とすべてをなげうって献身。「ケンブリッジ・セブン」の一人としてハドソン・テラーの中国内地宣教会へ。後、アフリカ奥地への伝道。世界福音伝道団（WEC）創設。「もしも、イエス・キリストが神であられ、しかも私のために死んでくださったとするならば、彼のためにどんな犠牲を払っても払い過ぎることはありません」は同伝道団の標語。バックストンの次男アルフレッドはスタッドの娘と結婚。アフリカ奥地伝道においてスタッドの下で働く。アルフレッドのエチオピア語訳聖書や、彼の宣教戦略は宣教界においても評価されている。

③聖職者への道 1882年のはじめ頃、聖職者への召命を感じ、決心。その準備のため、大

学にもう1年とどまる。当時、その18ヶ月前に開校したりドレー・ホールの初代学長に**ハンドレー・モール**がいた。バックストンはその学校の熱烈な訓練をむしろ恐れ、三一カレッジにとどまり、**ウエストコット**の下で新約学を学ぶ。研究課題は、ヘブル書から「我らの主のご人格」。『信仰の報酬』37頁。***註1**

1882年末から、ロンドンの南ケンシントン、オンスロー・スクエアの聖パウロ教会へ。偉大な福音界の巨人、ケズイック聖会指導者**ウェブ・ペプロ**の下で平信徒として働く。ケンブリッジでの友人**ジョン・バタスビー**と住居を共に。**エルウイン・オリファント**と共に働く。『信仰の報酬』37頁。

4) 教会史的意義

- ①時代的背景。信仰覚醒運動の大きなうねり。あらゆる階層への国内宣教、海外宣教、福音主義社会活動、ホーリネス運動。
- ②バックストン家の信仰的背景。福音主義の国教会。ピューチタニズムの流れにあるクウォーター。
- ③家庭的背景。敬虔な国教会生活。宣教と博愛主義。
- ④神学的背景。ケンブリッジにおける福音主義。
- ⑤霊的背景 (Spirituality)。英国国教会福音主義陣営におけるホーリネス的霊性。

2. バックストンの信仰体験—新生・聖化・宣教への召し—

「バックストンとその時代」で見た時代的、人的環境のバックストンに与えた影響と感化は計り知れない。しかし、それらは、バックストンを造った第2義的要素であって、決定的要因でない。「結局、真の紳士を造るのは生まれでなくして恩寵である」（『信仰の報酬』23頁）。彼を造った決定的要因とは、とりもなおさず、「新生」と「聖潔」の体験。

1) 新生の体験

①**ムーデイの歴史的ケンブリッジ伝道** 1883年秋、ムーデイの8日間に及ぶ伝道。ムーデイにとっては大きな賭け。気乗りのしない重い心をもってこの要請を受諾。モールらは熱心に支持。キャンペーンの前半は学生たちの冷やかし、妨害。ムーデイらは熱烈な祈り。聖霊の働きの中で救いのみ業が。

②**バックストンの新生の経緯** 11月9日(火)。ムーデイ、ルカ14:17を語る。「来たれ、万のもの既に備わたり」。「既に」の強調。長い間、頭で知っていた一点が水晶のごとく透明に。「心と霊に要する一切のものをあなたは持っている。今、キリストはそれを受け取ることを待っている」との迫り。「キリスト教の真理に対する足取りの重い義務的応答を、自発的な生命と本能に一変した」。「単純な神の賜物の事実、我らのわざや献身によらず、主における信仰によって受け取るべきこの事実」を経験。『信仰の報酬』39頁。

③**バックストンの新生の位置づけ** 「この経験が学校や大学において、既にクリスチャン信仰の信念を抱いていた後に与えられたのであるが、これを聖書的に、どこに「置く」べ

きかは難しい問題である」（『信仰の報酬』30頁）とゴッドフレーは言いつつも、バックストーンがキリストと彼の御言の方に、「方向転換」し、新しい生命の賜物を受け取り、「再び生まれ」、意識的に神の子となった「新生」の日と位置づけている。（同 39、49 頁）。

したがって、このケンブリッジにおけるムーデイのキャンペーン中のバックストンの経験を伝道者となる決意表明、献身の表明と受け止めるとき、（キリスト教大事典、都田恒太郎、中村敏らはそのように受け止めている）、バックストーンの本質をとらえる上で重大な欠陥を生じる。（工藤論文「バックストンの流れを汲む聖化について」福音主義神学第7号、6頁）。

2) 聖化の体験

①バックストンの聖化への道 「新生」経験の後、彼は「自分の心のきよくないことを感じた。」これが圧倒的な新生の恵みの後の彼の心の状態。それは、新生の不十分さを物語るのではなく、否、十分な新生経験であったればこそ、やがて来るべきさらにまされる「ホーリネスの恵み」への渴望を意味する以外の何ものでもなかった。彼の聖化への過程。

- ・ ウェブ・ペプローの説教とエルウイン・オリファントの証しの感化。
- ・ ウェスレーのいうところのホーリネスへの強い覚醒。
- ・ 自分の心のきよくないことの実感。
- ・ 聖書に啓示されている聖めの約束を示す聖句への信頼。
- ・ この心の純潔と聖霊のバプテスマこそは、彼の生涯の奉仕の原動力になるとの確信。・ この大真理を聖書の示すままに学び、見出したところを説教しはじめる。
- ・ そして、「ある日」、ヘブル 10:19 から、聖霊は彼自身のメッセージを用いて、彼の心の、その時、そこできよめられたるを確信せしめた。（『信仰の報酬』40、41 頁）

「ある日」はムーデイのケンブリッジ伝道の終わったときから、その年（1883年）の末まで、「引き続き教区に於て働き続けている間」とみれば間違いない。（同 40 頁）*註2
なお、ウェブ・ペプロー聖化の概念の位置づけは、（W.E.Sangster: The path to Perfection Nashville, Abingdon, Cokesbury Press, 1963. p81）を参照。一方、オリファントについてはポロックの The Keswick Story で言及（p.64）

3) 日本宣教への召し

1887 年末頃から、海外宣教への思いつのり、同労者にパロット氏夫妻、ミス・サンダー。C.M.S. に応募、カシミールを希望。父フォーエル・バックストーンはカシミールではなく、日本が候補にあがったとき確信を抱く。父フォーエル・バックストーンは一つの宣教団体（C.M.C.）の下に行くことを慫慂。そう、いいながらも、日本における彼の生涯の働きの理想的、また聖書的結果を想見して、一文を残す。

「最も願わしく思われることは、我らの宗派のどの線にも従わず、すべての日本人クリスチャンを一つの会衆に結合させる日本人教会があることである。英国教会はそういうものからははるかに離れている。だからこそ、かかる計画をもて一致することの出来る牧師達がこれを助長するために結束すべき理由がある。分かたれた単位としては彼らは何事もな

しえない。結束した一隊としてこそ多くをなしうるのである。あなたの愛するテイ・フォーエル・バックストン」。(『信仰の報酬』60頁)1889年3月17日。外国宣教の一点で、神との格闘。爾来、6ヶ月、召命を熟慮。自己絶望、恐れ、召命の光栄、歓喜、確信へ。

*註3

4) 教会史的意義

- ①ムーデイのケンブリッジ伝道の歴史的的重要性。ケンブリッジに救霊と宣教の火が投げ込まれる。ケンブリッジ・セブンの献身。やがて、中国内地伝道会へ。なお、ムーデイ伝道とスタッドらの献身については、『炎の人C・Tスタッド』18-23頁。
- ②ゴッドフレーによるバックストンのムーデイ伝道における聖書的「新生」の位置づけはウエスレーの回心に通じるものがある。
- ③バックストンの聖化の経験は、明確な新生が土台となっていた。
- ④バックストンは「ウエスレーのいうところのホーリネス」を求めたが、あくまでも聖書の約束された真理として、聖書そのものに求めた。
- ⑤ただ、ホーリネスに関する説教の感化はウェブ・ペプロー、その証はエルウイン・オリファント。しかし、ケズイックの線でも、極端な根絶説の線でもない、聖化の神学的路線は「ウエスレーのいうところのホーリネス」であった。
- ⑥バックストンに聖化を確信させ、体験させた聖書箇所はヘブル10:19以下。この箇所は後にもしばしば彼の説教で説き明かされる。彼は、10:19の「こういうわけで」をそれまでの教理的部分の恩寵に立つと共に、その直前の三位一体の神の恩寵に立って、「こういうわけで」を受け、「至聖所の生活」へ大胆に信仰を持って入ることを奨励する。三位一体の神の恩寵と言ったが、「この御旨に基づき・・・わたしたちはきよめられる」(10:10)から「**きよめは神の御旨に基づく**」、「イエス・キリストのからださがさげられた」(10:10)、「一つの永遠のいけにえ」(10:13)、「彼は一つのささげ物によって、きよめられた者たちを永遠に全うされた」(10:14)から、「**きよめは御子なる神の贖いに基づく**」、「聖霊もまた、わたしたちにあかしをして・・・」(10:15)から、「**きよめは御霊のあかしに基づく**」とする。だからこそ、開かれた生きた新しい道を通り、至聖所へと勧める。
- ⑦彼の新生、聖潔の体験は彼の生涯と奉仕の源泉。日本のホーリネス運動の源流。
- ⑧日本への召し。神の摂理。父トーマス・フォーエル・バックストンの宣教観はバックストンの日本における超教派的宣教の核心とも言える。

3. 日本宣教—松江バンドの形成—

1) バックストン来日とその時代

バックストンが来日した1890年(明治23年)という年は日本のキリスト教史上重大な意義をもつ年。1889年「大日本帝国憲法」(明治憲法)発令。1890年、「教育勅語」渙発。二重の鉄の壁、外側からキリスト教会を圧迫。同じ頃、「急成長」をとげていた日本のキリスト教会に内部から痛烈な打撃を加えたのが「ドイツ福音普及教会」および「米国ユニ

ラリアン神学」に代表される「新神学」と呼ばれた自由主義神学。さらに、1890年という年は、1886年「全国基督教信徒親睦会」以来試みられてきた「日本基督一致教会」と「日本組合基督教会」合同運動が流産した年。超教派協力事業に見られる「集中化」を教派形成、すなわち「分派化」の方向に決定づけた年。

2) 日本の初期プロテスタンティズムとの関係

バックストンの来日は新教渡来に遅れること30年。日本の初期プロテスタント宣教は明治初期の欧化主義とも相まって急成長。しかし、前記の内外からの抵抗勢力により1890年を境に「沈滞期」へ。ただ、バックストンとそのスタッフの松江を中心とした山陰伝道はそれまでの急成長を継続するかのように入進。都田恒太郎は松江バンドと日本の初期のプロテスタント宣教との関係を、バックストン来日に先立つこと30年に渡来したプロテスタント宣教師たちによってその根がおろされた福音主義運動が、バックストン宣教により油が注がれ燃え上がらされたと見ている（都田恒太郎、『バックストンとその弟子たち』バックストン記念聖会・1968年、7頁）。これは、いわゆる日本初期の三つのバンド、横浜バンド、熊本バンド、札幌バンドと全く異種の松江バンドをいう位置づけではなく、前三者との連続性をもたせた見解である。それと共に、「油を注いで燃えあがらせた」という表現には、バックストン宣教には、それまでにない聖霊による聖化の強調があり、その点からすれば、非連続的な新しい流れと見ることができる。

日本の初期プロテスタンティズムは、世界宣教の潮流から見て、「福音同盟会」の影響下にあったことは否めない。「福音同盟会」の信仰「九箇条」や年頭の「初週祈祷会」の推進を見ても、それによって祈祷会はリバイバル化し、最初のプロテスタント教会（公会）は起こされ、教会の信仰基準は「福音同盟会」の「九箇条」が採用されている。

「福音同盟会」（Evangelical Alliance）と1858-1859の「福音覚醒運動」（Evangelical Awakening）と密接不離の関係は、Edwin Orrによって指摘された。

Orr, J. Edwin, The second Evangelical Awakening in Britain (London: Marshall, Mogan and Scott Ltd. 1953) P217

「バックストンとその時代」で見たように、英国のRevivalismの中で育ち、しかもC.M.S.に所属し、来日したバックストンと日本の初期プロテスタンティズムとは結びつけ得る。バックストン以前の日本の教会が「純福音信仰を素直に受け入れ、清新なリバイバルの雰囲気にも包まれていた」（柳田友信、『日本基督教史』聖書図書刊行会、1959年、50頁）ということであれば、一層うなずける。（工藤論文、福音主義神学第7号、3頁）

日本の初期プロテスタント宣教とバックストン宣教とを結びつけるもう一つの理由として、この期まで、「交錯」と「緊張」の関係をもたらしてきた「分派化」と「集中化」の二傾向が「分派化」にイニシアティブがとられるようになったこの時期にあって、（大内三郎『日本キリスト教史』日本基督教団出版局1970年、192-227頁）バックストンの宣教がカトリック教会的Propaganda（布教）や教派的プロテスタント・ミッションと違って、石原謙の言うところの純粋な「プロテスタント宣教」を展開したことにあつた。（石原謙、『日本キリスト教史論』新教出版、1967年、6-7頁。石原はハドソン・テラーの中国内地宣教会を例に、ただキリストとその福音を伝え、教派的海外進出を求めないプロテスタ

ント宣教のあり方を述べている。)

バックストンを送り出した C.M.S.は、1869 年（明治 2 年）「米国監督教会」を援助するために渡米しているものの、C.M.S.本来の意向とバックストン家の意向が組み合わされた超教派宣教であった。それは、先のフォーエル・バックストンや後にウイルクスが述べているように、その宣教の目的とヴィジョンが、英国国教会を海外に進出させるのではなく、欧米の教派のどの線にも従わず、すべての日本のクリスチャンを一つの会衆に結合させる日本人教会を指向するところのものであった。*註 4

3) 日本へーバックストン宣教の基本線ー

1890 年 10 月 11 日(水) 一行日本へ出発。バックストン夫妻、パロット夫妻、ミス・サンダー、ウインド氏、ミス・トムソン、ミス・ジェーン・ヘッド。C.M.S.との関係。その働きは C.M.S.に対して責任はあるが立場は独立とし、その指導、訓練及び支給についてはバックストン家が責任を取る。C.M.S.の「任命書」。(『信仰の報酬』68,69 頁) 一行カナダを横断、太平洋、そして日本へ。1890 年 11 月 24 日(月)、日本に到着。

「我らの前に、高い岩山が見え出した。これが東海岸を造っている。村々や樹々が見える。今しも漁船の群れ居る中を通過して来たところである。さらば、ここに、神が我々を召し給いし国がある！それは、私にとっては、聖であり、神聖にさえ見えると……お互いがかくも多くを放棄したその国である……」(同 70 頁)

- ①一心不乱に日本語の勉強しつつも。
- ②毎週一度の説教。週間の諸集会の責任。常に聖潔の大真理を語る。
- ③彼は「日本に勝つ唯一の能力」は聖霊であると既に悟っていた。(同 72 頁)
- ④「聖霊が与えられる喜悅なくしては、回心者は、又、後戻りしてしまう」であろう(72 頁)
- ⑤「日本の要するものは、より多数の教役者ではない、少数の聖霊に満たされた者たちであると、既に、彼に悟っていた所である。」(73 頁)
- ⑥「聖霊のバプテスマ」という小冊子を宣教師たちに配布。経験を積んだ宣教師たちもその真理への渴望。
- ⑦三つの反動攻撃

第 1 は、バックストンが聖公会以外で語ることに對する異議。

第 2 は、クリスチャンの心の聖めのメッセージに對する反対。

第 3 は、日本人がクリスチャンになること。(仏教界から)

現地の監督からの第 1 の反対にバックストンは驚く。C.M.S.との間では、彼らの働きは本国同様、英国教会を回心者の上に押しつけない、他教派においても語る自由があるとの確約があった。第 2 の反対については、英国国教会の祈祷書の中に聖潔の教理を述べていることを指摘。「神よ、我らの心を潔め、我らの内を潔めたまえ」、「聖霊の靈感によって我らの心の思を潔め、汝をまったく愛せしめ、汝の聖なるみ名に適しくこれを崇めさせ給え、主キリストによってこい願い奉る」。

⑧バックストンの宣教方針。聖書に基づく宣教事業。宣教師の行動とその働き、組織の原則。宣教師は恒久的な支配権を取らなかった。エルサレム会議では、ユダヤ人クリスチャ

ンの習慣で異邦人クリスチャンを縛らなかった。*註5

バックストンが松江に行くのに、長老派のウィンド氏が一緒であることを監督は認めず、ついにウィンド氏はC.M.S.を去る。(アメリカ、バプテストに加入)バックストンはこの神の人を負うことに非常に悲しむ。

4)バックストンの松江宣教

1891年4月。松江において伝道開始。わずかな信徒と教会内で祈祷会。劇場での伝道会。700人ほどの熱心な聴衆。

1892年の始め頃、最初の洗礼式。

1892年2月、姉エフィー来援。バックストンは和服を着始める。

1892年末頃には、松江、米子地方に七つの教会設立。劇場での「大騒動」はニュースに。(明治廿五年十一月八日の新聞に、『耶蘇教演説会の大喧嘩』の見出しで『和多見永楽座』における大騒動の記事が掲載。資料として当日の新聞記事コピー入手)

実業家、学生の中からの回心者。彼らの出勤前の早朝(朝五時)聖書講義。神の救いの全幅へ。聖霊に拠し彼らを宣教へ。青年の一隊の「福音旅行」も。時に一人が村に残り進んだ教訓を。バックストン自身も同行。説教、訪問、集会準備、召集、指導などの実践と訓練。松江における日本人信徒訓練、働きの前進、伝道所を各地に。米子は前進運動の基地に。*註6

日本にある教会のため、神が日本人を起こし用いられることを確信。

1893年4月。赤山住宅完成。(父からの贈物)

献身者たちの修養を行う。赤山塾での聖書講義や説教集に『ヨハネ伝講義』、『レビ記講義』、『創造と墮落』(創世記)、『赤山講話』など。全て堀内文一筆記。『赤山講話』は日本における最初の説教集か。「ダビデの三勇士」、「枯骨の谷」など、救霊とリバイバルの説教は今も迫力をもって読む物に迫る。日本語による『レビ記講義』は最初のものか。

1893年秋、ハドソン・テラーを招き神戸で日本の各教派の宣教師たちと英語のわかる日本人を招いて修養会を開催。おそらく日本における最初の聖会(修養会)。円熟した宣教師テラーと若きバックストンは「全く一つ」となって交互に説教奉仕。聖会の祝福の三大原則は要約すると、第1は、確信がくるまでの祈祷、第2は、聖書に立って、キリストご自身とその「大いなる尊き約束」を示すこと、第3は、イエス・キリストへの全き信頼、明確な恵みの確証。

1894年、休暇で帰英。ケズィック聖会での説教。

1895年、日本におけるアライアンスの働きの指導者になってほしいとのA.B.シンプソンからの要請を祈りと熟慮の結果、辞退。

1897年10月、パジェット・ウィルクス師来日。松江へ。

1899年12月、中国で義和団の乱がおこり多くの宣教師とその家族が殺される。C.I.M.だけでも80名の犠牲者。

1900年秋、上海に中国各地から集まる500名からの宣教師たちの2週間にわたる修養会に講師として奉仕。

1990年には、小さな広瀬の村の教会に60名の受洗者が加えられる。松江における初期の働きは、年間平均40名の受洗者。松江における聖書講義には、30名近い日本人実業家、伝道者、教師など出席。笹尾鉄三郎、三谷種吉、中田重治なども加わり、用いられる。1990年までに、松江の教会だけで310人の受洗会員、その他付近一帯に新しい教会。春、秋には松江にて特別聖会。毎年、各教会に3名の教会役員が定められる。役員たちへの手紙については『信仰の報酬』（133-136頁）

5) バックストンの弟子たち

松江のバックストンのもとに多数の修養生が参集。赤山塾における弟子たちの養成。霊的面と共に物質面においても。1895年（明治28年）から1901年にかけて、松江は「日本の純福音運動指導者の養成地と発祥地」ともなった。（都田『バックストンとその弟子たち』144頁。都田は「純福音」という用語を用いているが、今日では「純福音」は別の流れをさしている。今日的にはホーリネス信仰を高調する福音派と言える。）

① 同志社からの弟子たち

バックストンは当時同志社の教授であったシドニ・ギューリックと親交。同志社は明治18年にリバイバルが起こるが、その後新神学により大きな打撃。バックストンの同志社での説教は学生たちに多大なインパクト。

竹田俊造 大阪の泰西学館でもバックストンに触れる。同志社の理科に学ぶ。セラピムのようなバックストンの礼拝と奉仕に捕らえられ、バックストンのもとへ。

三谷種吉 同志社在学中に松江へ。バックストンの通訳やウィルクスの日本語教師もつとめる。音楽の才能に恵まれ、『福音唱歌』、『靈感賦』を編集。

藤本寿作 同志社神学部在学中、竹田、三谷らと共に松江へ。聖公会の教職に。

堀内文一 竹田の導きでバックストンのもとへ。バックストンの聖書講義、その他説教を筆記。松江時代のバックストンの著書は彼の筆記による。

② 「小さき群」からの弟子たち

米国太平洋リバイバルの中で、入信し、献身した者たちが帰国。**笹尾鉄三郎、河辺貞吉、秋山由五郎、松野菊太郎、木田文治、東ヶ崎菊松、伴新三郎、森永太一郎、上田恭助**ら。彼らを信仰的に導いた人が、米国メソジスト教会の**ハリス**。ハリスはかつて札幌バンドの人々を指導。笹尾、河辺、松山、松野、木田らは帰国。伝道者に。笹尾は、銀座教会で信仰生活を進めていた**御牧碩太郎**をきよめの信仰へと導く。やがて、帰国組の笹尾、河辺、松野らと御牧、**土肥修平、須永徳太郎**らは信仰と祈りのグループ「小さき群」を起こす。後、神学、信仰、実践伝道にいきづまった彼らは、バックストンの招きで松江へ。*註7

③ 松江で入信して弟子となった者たち

永野武二郎、都田友治郎、由木虎松（由木康の父）、**米田豊、奥田恒三郎**（耕天の父）ら。

さらに**中田重治**も時折来訪。また、赤山には入れ代わり立ち代わり全国から来訪者参集。例えば、香登教会初代牧師**溝手文太郎**（同志社神学部出身）も40日間赤山滞在。一室が与えられ、み言葉と祈りで一人神との交わりをすることが勧められ、また聖書講義などで恵みを受け、一変して帰香。

土肥修平は自著『焼跡の釘』の中で、当時の松江を思い出を記す。

「そのころバックストンの所には、聖公会の教役者五十名、他派の教役者三、四十名もあり、彼らの霊肉二つながらをバックストンは養い育てていたわけである。」*註8

修養生活は1. 毎日早朝から聖書講義。2. 午後は求道者、信者の訪問、伝道。3. 夜は市内数カ所にあった伝道館における伝道集会の奉仕。4. 週末は、松江および付近一帯への伝道派遣。

「働き人への手紙」（『信仰の報酬』112頁以下）は、新約聖書の書簡のような筆致で働き人へのねんごろな勧めが記されている。

①日常の小事こそ大事。早朝、時間を定めた静時を。最善が次善に奪われないように。

②午前、聖書、霊的書物、説教準備を。また、読むとき常にノートを用意を。

③正午。祈祷表に従っての各地伝道地の祷告。午後の訪問。要点は二つ、教えること悔改めに導くこと。聖書を用いて靈魂の救いを目がけよ。むだ話を避けよ。行く前に祈れ。別れ際に祈れ。帰途祈れ。帰宅して祈り讃美せよ。回心者を訪問し、聖書、祈り、家拝を導け。戸別トラクト配布。また船着き場、人力車夫のたまり場へトラクトを。路傍説教も。

④夜の集会。時間を守れ。

⑤祈る者は説教者よりも尊い。説教者はみっちり祈り準備せよ。準備なき説教は聖霊を信じるのではなく自己信頼。同じ説教を新しい説教をするように度々語れ。時間を守れ。30分以内で。魂がその場で救われることを期待せよ。説教後、個人伝道を。

⑥翌日のため早く就寝を。

一日の過ごし方と共に金銭管理の勧め。お金は偉大な恩寵の器とも自らを腐敗させる危険性にも。ウェスレーの言うように、第1に、出来るだけ獲よ、第2に、出来るだけ蓄えよ、第3に、出来るだけ与えよ。毎月、月給の十分の一を貯蓄に。ぎりぎりの十分の一ではなく「豊かな十分の一」の献金を。

渡辺善太は第1回バックストン記念聖会（1960年11月、東京：淀橋教会）での講演で「宣教二世紀とバックストン先生」と題して語っている。

バックストンに、神によって現れた特徴は三つ。第1に神秘的なこと、第2に、聖書的なこと、第3に教會的なこと。

神秘的と言ったが、神秘主義に二種あり。一つは恍惚主義、エクスタシー。もう一つは深く神と交わってこそ、主と我との境が保たれている。バックストンには汝と我との境目のある健全な「神との交わり」がある。

聖書的と言ったが、バックストンは理屈を言わない。学者、神学者、雄弁家ではない。しかし、「聖書によって神が語りたもう」がある。「聖書を通して神が語りたもう言葉を聞いたことのある人」、それがバックストンの教え。「今日日本の教会で必要としているものは何であろうか。聖書学は進んだ、ヘブル語、ギリシャ語は進み、聖書神学は進んできたが、聖書を通して神が語られたもう。これが欠けている。」

教會的と言ったが、バックストンはエキュメニカルでありながら、聖公会に留まった。聖公会だからジョン・ウェスレーやバックストンが出た。「神秘的で聖書的で、巡回伝道者だという人は、なんで教会を離れるものか、ここに問題がある」。「聖書を信じるということは、聖書を結集し、信仰した歴史的な教会、現実の具体的教会の信仰にあずかるということ。」「教会に根をおろして、それにとらわれずにエキュメニカルな団体を起こし

て、日本伝道隊のようにそれぞれの教派の中に入って、信仰復興を起こさせるようにしながら、自分はどっかと母教会に根をおろしている」。(『バックストン先生の思い出』、第5号、バックストン記念霊交会 2,3、16頁)

5) 松江からの拡大

バックストンの弟子たちは、松江で養い育てられ日本各地の伝道へ。

土肥修平 バックストンは土肥を東京在住のケンブリッジ時代親交のあったC.M.S.宣教師バンガムに紹介。明治29年、新橋教館の主任を経て、渋谷の聖シオン会堂でバンカムと共に伝道。後、聖公会から離れ、巡回伝道者に。

御牧碩太郎 松江に2年近く学び、明治30年上京。バックストンの紹介で「万国警官ミッション」で働く。バックストンが中心に刊行していた通俗聖書研究誌『聖書の友』の編集。のち純福音系の有力雑誌『霊の糧』の編集責任。

河辺貞吉 松江での滞在は短期。しかし、バックストンとの親交と協力は永続。明治28年、淡路島に開拓伝道。のち日本自由メソジスト教会に入り、日本におけるこの派の創始者。大正期、大阪市内の日本橋教会の礼拝出席数は日本一。東の中田重治と西の河辺貞吉は好一対の活動家。

笹尾鉄三郎 足かけ4年松江で学ぶ。バックストンから聖書と共に人格を学ぶ。笹尾の葬儀には、「私は笹尾さんから多くのものを学びました」とバックストンも。日本を代表する聖徒。松江から河辺に招かれ淡路伝道へ。後、中田重治が破竹の勢いで日本伝道を推進、東京神田の表神保町に中央福音伝道館、柏木に移って聖書学院を開くや、バックストンの紹介で、中田の協力者に。教鞭をとること12年。晩年、巡回伝道者に。花嫁なる教会のよそおいをととのえるために。1914年(大正3年)、47歳の若さで召天。

中田重治 明治3年弘前生まれ。弘前メソジスト教会で牧師本多庸一の感化。本田が青山学院長として上京すると中田も青山学院へ。熱血児、学業よりも柔道。正式な卒業ならずとも千島へ伝道。のち、シカゴのムーディ聖書学院へ。そこで明確な聖潔の体験(大伝道者になるとの野望をもことごとくささげ明け渡して)。帰国途中バックストン家を訪問。帰国後、しばしば松江訪問。

秋山由五郎 長く松江に滞在。上京して東京バプテスト教会牧師。中田や笹尾に導かれて聖書学院の教授に。笹尾が巡回伝道に立つや秋山も巡回伝道者に。弟多辻春吉も聖書学院卒業後純福音伝道に尽力。

永野武二郎、竹田俊造、三谷種吉、堀内文一はしばらく松江に残る。

永野は日本聖公会松江教会牧師に。のち満州伝道へ。

竹田は米子、境港で伝道。都田友治郎、由木虎松、木村宏一、奥田常三郎らが献身。次々と東京の聖書学院へ。竹田の日本伝道隊での働きは後述。**三谷**は教会音楽に尽力。後、単独でキリスト教の伝道文書を発行。**堀内**も河辺のフリーメソジストの神学校を助け、後日本伝道隊の働きの結実を「聖書教会」としてまとめる。関西きっての聖徒。

松江の聖会から、さらに関西の有馬聖会、関東の箱根聖会など霊的運動は進展。バックストン、ウィルクスらを中心に、笹尾、中田、河辺、竹田、秋山、御牧ら奉仕。

(以上、都田『バックストンとその弟子たち』186-196頁)

6) 教会史的意義

①日本初期の福音的プロテスタンティズム、横浜バンド、札幌バンド、聖書信仰、贖罪信仰と規を一つにしつつも、聖化の恵みと伝道を高調した「松江バンド」の日本キリスト教史上果たした役割は大きい。札幌バンドの個人的、熊本バンドの社会的、横浜バンドの教会的特色からすれば、松江バンドは伝道的とも云われる。松江はまぎれもなく、日本における「純福音運動」、あるいは「ホーリネス運動」の源泉。松江からの流れを大別すれば、東京を中心とした中田、笹尾らの**ホーリネス教会**（むろん、この流れは中田、カウマン、キルボルンらの米国ホーリネス運動から端を発する）、大阪を中心とした河辺らの**自由メソジスト教会**（自由メソジストも本来は米国のウエスレアンの流れ）、やがて神戸を中心とする竹田らの**日本伝道隊**の流れ（これは、前二者と比較してバックストン・ウィルクス直流の英国福音主義、英国ホーリネス運動の流れ）。*註9

②日本キリスト教史上、「急成長」が頓挫した未曾有の沈滞期に、リバイバル的宣教成果をあげた松江バンドの秘訣は、聖書と聖霊の働き以外の何ものでもなかった。回心から心の純潔、成熟したキリスト者へという個人的救いの秩序、ローランド・アレンと極似した宣教方策なども、すべて聖書そのものに求め、聖書に根ざしていたものであった。

③松江バンドの拡大は、全国各地、各教派に及んでいったが、教会性を持続すると共に、超教派的性格を持っていた。具体的には、教職者養成、文書伝道、巡回、聖会開催などの形をとって推進された。

4. 日本宣教—日本伝道隊の形成—

1) 日本伝道隊の設立

バックストンは子女の教育のため帰英。松江を中心とした山陰伝道は約12年。1903年（明治36年）、英国のケズィック聖会の最中、バックストン、ウィルクス、ハーバート・ウッド夫妻らは半徹夜の祈りの結果、「日本伝道隊」（Japan Evangelistic Band）を結成。

これは過去十余年松江を中心に展開され、その効果が実証されている「松江バンド」を今や「全日本」的に展開しようとする試み。小島に云わせると、松江バンドのスタッフもヴィジョンもプリンシプルも何かも「ゴッソリ」移植した「日本バンド」（これについては、小島の説教「松江バンド—その歴史と信仰—」。小島伊助全集Ⅰ、148頁以下参照）。バックストンはJ.E.B.の総理として英国において責任をとる。その後、数回にわたって、訪日。現地日本の主幹はパジェット・ウィルクス。彼と共に働く日本人教職は竹田、三谷、御牧、堀内ら。主の臨在の輝きの中で、全く肉を頼らず「わが霊によるなり」（ゼカリヤ4:6、J.E.B.標語）の礼拝と奉仕。

2) 同労者ウィルクス

ウィルクスは、1871年英国国教会牧師の子として誕生。F.B.マイヤーの説教を聞いて新生

の恵み。オックスフォード、リンコルン・コレッジで、古典学を学ぶ。学生時代から熱烈な伝道。バックストンと異なり、教職でなく生涯ミスター・ウィルクス。聖化の教理においては純然たるウェスレーの子。1897年、バックストンに遅れること7年、来日。恵みのバックストン、まことのウィルクスは絶妙なコンビ。驚くほどの日本語力。著書に聖書講解、説教集のほか『救霊の動力』、『信仰の動力』、『贖罪の動力』、『キリスト者生涯の動力』などダイナミック・シリーズは世界的。特に『救霊の動力』は日本宣教の最中生まみ出され、日本人の救霊の実例多し。教派を越えて日本宣教師の教科書と云われる。本田弘慈は少なくとも百回は読んだという。本田の救霊スピリットと方策の源泉。

3) 日本伝道隊の3大目標

J.E.B.の目指すところは、第1に、全日本人にキリストの救いを。第2に、全日本キリスト者が「全き救い」を。第3は、ウェスレーやムーディのような聖霊に満たされた神の僕の養成を。1905年、東京から神戸に本部が移され、具体的働きが展開。

4) 日本伝道隊の働き

①**歓楽街伝道** 神戸基督教伝道館が開設されたのは、1905年晩秋、「多聞通り」で。ついで、当時神戸きっての歓楽街「湊川新開地」に移される。毎夜の伝道会。ウィルクスと共に働く同労者に竹田。ウィルクスと竹田の信念は二つ。第1は、人は福音を初めて聞いて即座に救われ得る。第2は、救われた者の中から神は働き人を起こされる。伝道館は当初教会形成せず、入信した信徒は J.E.B.と関係する長老教会、バプテスト教会、フリーメソジスト教会などへ。後に撰理的に独立した群が起こされる。**樋口勝吉、柘植不知人、安藤仲市**らはこの働きの中で入信、献身。

②**聖書学校の働き** 神戸平野にて1907年（明治40年）、8名の学生をもってスタート。校長に竹田、ウィルクスこれを助ける。1914年（大正3年）から4年間、バックストンも定住。第二世代の「バックストンとその弟子たち」。**樋口、沢村五郎、柘植、野畑新兵衛、小島伊助、佐藤邦之助、森俊治、舟喜麟一、佐野茂理治**ら。この間生まみ出されたバックストンの書物は『使徒行伝講義』、『詩篇の靈的思想』、『ルツ記靈解』、『雅歌靈解』、『ヨナ書靈解』、『リバイバルの要件』など。当時、バックストンの秘書をしていた米田豊により筆記。なお、米田の『旧約聖書講解』、『新約聖書講解』は広く今日まで読まれているが、カッコの中の多くの引用文はほとんどバックストン、ウィルクスからのもの。

③超教派への教役者派遣

J.E.B.は教会をつくらぬとの当初の憲法にしたがって、聖書学校出身の教役者たちは日本伝道隊員として「全き福音」を証しする使命をもって各教会に派遣され、教会の牧師として、また伝道会、聖会、修養会などの講師として活躍。派遣教会はメソジスト、組合、聖公会、同盟、フリーメソジスト、福音教会など。もはやこうした「隠れた日本伝道隊の働き」の歴史は明確にすることはできない。たとえば、舟喜、佐藤らは飯田メソジスト教会に派遣されている（共にその地からの夫人と結ばれている）。

④**聖会開催** 伝道隊員の年会を兼ねた有馬修養会には数百人出席。各地での聖会応援。香

登修養会なども。

⑤**文書伝道** 特に超教派の機関誌「霊の糧」は御牧の主筆によってなり、明治後期から大正における「松江バンド」の働きを伝え、霊の糧をあまねく天下に提供した。

5) 教会史的意義

①日本伝道隊の結成の目的は、その綱領が語るように、いずれの教派にも捕らえられない、そしていずれの教派とも協力して行われる日本全土への伝道団の結成であった。日本伝道隊の綱領を参照。都田『前掲書』214頁*註10

②日本キリスト教史上の位置からすれば、日本伝道隊は、前期「松江バンド」の拡大に見た中田らの東洋宣教会、ホーリネス教会の働き、河辺らの日本自由メソジスト教会の働きと比べて種々の点で異なる。第1のことは、日本伝道隊は、小島が指摘するように、「松江バンド」の重荷、原則、方策、スタッフなど「ゴッソリ」松江から神戸に移植されたものと言ってよい。特に、バックストン、ウィルクスが直接に重荷と責任をもったところが、中田や河辺らのものと異なる。

第2のことは、中田や河辺らが教会形成を目指していたが、日本伝道隊は超教派運動であったこと。であればこそ、竹田などのような「隊員」でなくても、日本伝道隊は中田、河辺、笹尾らとは親密な関係にあった。のみならず、メソジスト教会、長老教会などの内面まで、日本伝道隊の働きが進められた。由木康はそこを力説してバックストンを「世界教会運動の先駆者」と呼んでいる。

③実際の働きとして、救霊の結実を既成の教会に送る。諸教会に奉仕する目的で教職者を聖書学校で養成する。教職者を諸教会に派遣する。聖会や文書をもって諸教会に奉仕する。これらの働きは諸教会と連動しているゆえに、日本伝道隊の歴史として記録することは不可能。小島はただ「上に行ってからのみわかる」と云った。自己の団体を大きくすることではなく、諸教会に仕えるという日本伝道隊の生き方、与え尽くして、自らは消えて行く。そこに初期における日本伝道隊の働きがあった。教会史的には、「教会内小教会」を目指したドイツのパエティズム、英国国教会の内外でメソジスト運動を展開したウェスレー時代のメソジスト運動と一脈通じるものがある。しかし、これらはいずれもキリスト教国を背景にしていたが、日本伝道隊の場合、異教国の中でのノンクリスチャン、クリスチャンの両者を対象とする超教派運動であった。

5. 日本宣教—日本伝道隊の働きの拡大—

明治後期から大正にわたって日本伝道隊は救霊伝道、聖書学校、既成教会への教師派遣、聖会開催、文書伝道などの形をとって前進。その中で注目すべき一連の四つの出来事を小島は述懐。それは1920年（大正9年）から1924年（大正13年）にかけてのこと。

1) 日本伝道隊の働きの拡大を象徴する出来事

①**1920年（大正9年）J.B.ソートンが日本伝道隊から独立** Jessie Blackburn Thornton

(1875-1958) ソーントンは米国でメソジスト教会の牧師。1904年、インド宣教。1908年(明治41年)来日し、神戸ユニオン教会で1911年まで奉仕。帰米、1913年(大正2年)再来日。日本伝道隊に参加。小島らの通訳で奉仕。1920年独立し、**朝比奈協**たちを伴って兵庫、京都、裏日本一帯に強力に福音伝道を展開。1922年(大正11年)9月、丹波柏原に「日本自立聖書義塾」を開設。学びと労働(ピーナツバター製造)と伝道をもって働きを推進。付近一帯に教会設立。初期の学生には**山白令一、藤村勇、木田愛信、藤田昌直**ら。後期には**岸本頌三、鎌野良作**ら。**中島彰**はその地で救われ、後献身。数年を経てこの義塾は沢村五郎らの日本伝道隊聖書学校に合流。文献に藤田昌直による『丹波に輝くソーントン』(いのちのことば社、1970年)がある。

②**1922年(大正11年) 柘植不知人、藤村壮七らが日本伝道隊から独立。**柘植不知人(1873-1927)は1913年(大正2年)9月、神戸新開地でウィルクスの説教によって回心。日本伝道隊の聖書学校へ。1916年(大正5年)10月10日大阪梅田裏通りでのペンテコステ経験(聖霊の満たし)は自著『ペンテコステの前後』に詳記。1922年(大正11年)有馬修養会を最後に日本伝道隊から独立。東京下落合に「基督伝道隊」通称「活水の群」を創始。「全ききよめ」と「神癒」とをもって文字通り火の流れとなって日本を席卷。今日も、日本基督教団の内外に数十の教会を擁し、活発にその働きを進めている。とくに晩年藤村の信仰的人学的感化はとりわけ日本基督教団の四国教区の教師らに多大な影響。同教区の造反の嵐から四国教区を守ったとも云われる。

柘植は日本伝道隊聖書学校時代バックストンに師事。多大な霊的影響を受ける。柘植、藤村と小島らとの霊的な絆も強く深い。その意味で「活水の群」はバックストンの流れの「直流」とも云える。柘植が創設した活水学院(神学校)は1931年(明治6年)解散したが、1983年、神奈川県平塚市の平塚福音キリスト教会内に活水聖書学院として再び設立、同脈の教職養成にあたっている。小島は柘植の福音を「葬りの福音」とも云う。「死物」を光の中で徹底して具体的に、処理、処置、処分、葬ることに特徴があるという。であればこそ、聖霊の働きも顕著になる。死と復活の福音を徹底させた、死と葬りと復活と顕現(キリストの事実に基づいて)の福音とも云える。

③**1923年(大正12年) 日本伝道隊婦人宣教師 M.A.バーネットら独立 舟喜、佐野らと共に「中央日本開拓伝道団」設立。**群馬、栃木、埼玉一円に開拓伝道を展開。前橋、足尾ほかいくつかの群が起こされる。**舟喜順一、羽鳥明**らもその働きの中で入信。献身。1927年(昭和2年)、舟喜らは福音伝道教会を組織し、聖書学校(中央日本聖書学校)を始め、伝道者養成にあたる。草創期には小島、秋山らも協力。この流れは戦後組織を定め福音伝道教団に。聖書学校は1971年に埼玉県羽生市に移転、中央日本聖書学院と改称。バーネットの信仰はその著『ローマ書註解』(小島伊助・羽鳥明共訳)に顕著。

④**1924年(大正13年)、**バックストンの高弟、ウィルクスとの絶妙のコンビを組み、日本伝道隊の中心となって強力にその働きを推進して来た**竹田が、日本伝道隊の群と共に独立**し、「神戸復興教会」を起こす。市内各地に天幕開拓伝道。春、秋の聖会などを通し働きは前進。安藤仲市らは竹田と行動を共にし、小豆正夫らはこれらの働きで入信。献身。

2) 新しい時期を迎えた日本伝道隊

日本伝道隊設立以来 20 年、ウィルクスとコンビを組み、聖書学校の責任を負って来た竹田俊造の独立で、日本伝道隊は新しい時期に。

①**1924 年（大正 13 年）**、ウィルクス、御牧らは**沢村五郎に聖書学校の任を依頼**。「幼な子のようになり校長はイエス・キリストご自身」（校長幼な子論）を条件に沢村は受諾。「聖書学校」の呼称を用いず「聖書学舎」に。神戸御影で始まった学舎は 1930 年（昭和 5 年）塩屋へ移転。今日の関西聖書神学校へ。初期の教師陣にウィルクス、ソーントン、カスバルトソン、御牧、堀内、青木澄十郎、青木幹太、大江邦治、小島伊助。特に、日本伝道隊の働きを拡大させた前四者と最も深いつながりのあった小島は、「導きの御手」により沢村と共に 50 余年、一筋に学舎の働きを貫く。

②既成教会への教師派遣の門戸が次第に閉ざされつつあったこの頃、**新主幹カスバルトソンの打ち出す「前進運動」（Forward Movement）**により日本伝道隊は教会のない新天地を求めて開拓伝道。聖書学舎もこの働きに参加。「前進運動」の結果、幾つかの群が起こされるが、日本伝道隊は教会形成（もしくは教団形成）を目指さないゆえに現実的に新しい問題に直面。ウィルクスの日本伝道の後期でのこの新たな問題の解決に、J.E.B.から独立した新たな教団の設立へと向かう。岡山には香登教会の佐藤邦之助らを中心とした「イエス・キリスト召団」が起こされ、神戸、大阪には堀内を中心とする「聖書教会」が起こされ、1935 年（昭和 10 年）、「日本イエス・キリスト教会」が設立。

③同教会が誕生した翌々年 **1937 年（昭和 12 年）**、**バックストンは丸 20 年ぶりに来日**。日本聖公会宣教 50 周年記念が来日の主たる理由。招聘は 3 団体。日本伝道隊、日本聖公会、基督伝道隊（活水の群）。竹田、柘植、病中の中田に、米田、小原らのホーリネスの群、河辺らの自由メソジスト、さらに大江のアライアンス、喜田川らのナザレン系、日本全国福音派総動員され、まさに「松江バンド」は「聖霊の大河」なる一つの流れとなって日本全国に流れ漲った。このバックストンの半年に及ぶ最後の日本での奉仕は、彼の「奉仕の冠」とも云われる。通訳は小島。この時の説教のいくつかが出版。『雪のごとく白く』、『**基督の形成なるまで**』、『**恩寵の成長**』、『**沙漠の大河**』、『**エホバの栄光**』など。またバックストンの邦訳ものにはこの他に、英国スウォニック聖会などでの説教、『**神の奥義なるキリスト**』、『**聖潔られた者の行歩**』、『**神と借なる行歩**』などがある。

④バックストン去り、世の風雲や急。国際情勢は緊迫、そして戦争勃発。1940 年（昭和 15 年）、日本伝道隊系の諸教会は沢村らを中心に**日本基督教団結成に備えて「日本伝道基督教団」を結成**。1941 年（昭和 16 年）、日本基督教団結成と共に「第 7 部」として加入。日本は敗戦。この激動の中、地下水のように底流していたひとすじの真清水は再び湧き出て地上に流れ出す。

3) 日本イエス・キリスト教団の結成

①日本イエス・キリスト教団の背景はまぎれもなく 1890 年（明治 23 年）以来の松江バンドとそれを継承した第一期の日本伝道隊。しかし、直接の生みの親は御影、塩屋の聖書学舎や湊川伝道館及び前進運動などの働き。第二期の日本伝道隊の成果である「日本イエス・キリスト教会」は日本伝道隊と不離一体のいわば「ご用教団」。しかし、戦後の日本イエス・キリスト教団は本質、生命、使命において叙上の流れにほかならないが、戦後の日

本になくなくてはならない「イエス・キリストの日本教会」(Japan church of Jesus Christ.現在では Jesus Christ Church in Japan)。

②1946年(昭和21年)、元日本イエス・キリスト教会に属していた者たちが、戦後における霊交互助を目的に「日本伝道会」を起こす。これに戦後できた教会も参加。この日本伝道会時代は日本イエス・キリスト教団の陣痛時代。かくして、一部の有志教会は日本基督教団を離脱。日本伝道会を改革し、1951年(昭和26年)7月20日、日本イエス・キリスト教団設立。間もなく他の教会も日本基督教団を離脱し、大同団結。初代委員長に小島伊助、副委員長に道城重太郎、委員に小豆正夫、安藤喜一、岸本頌三、本田弘慈、長島幸雄、橋本巽ら。現在、教会数130余。信徒総数約13,000人。「教憲・教規」の序文に、「本教団の福音的实践は、活けるイエス・キリストの臨在の聖前における、全き信仰と服従である。即ち、本教団の主宰者は主御自身であり、その御指導は聖言と聖霊である」とある。教団の標語は出エジプト記33章14節。

4) 教会史的意義

①日本伝道隊の第一期の結実には教会及び教団形成は見られない。前述したように徹底した超教派運動。形体的な歴史的産物は見えてこない。

②第二期における日本伝道隊の働きは、日本伝道隊から独立した群と共に、その後起こされた聖書学舎や前進運動によって、結局「日本イエス・キリスト教会」が結成され、戦後、「日本イエス・キリスト教団」の設立を見た。第一期の日本伝道隊の超教派性と比べると第二期においては日本伝道隊の働きは教会(教団)形成に結果的には結びついた。

③バックストンやウィルクスらの働きのすべてが日本イエス・キリスト教団に結びついたとは言えない。前記の四者に見る拡大ほか、バックストンやウィルクスの感化、影響が直接、間接にいかにか幅広く諸教派に及んでいるかは見過ごしできない。ただ、日本イエス・キリスト教団に限って云えば、これはバックストン宣教の本来の幻が具現したとも見ることができる。海外宣教、世界宣教が、教派的ミッションであるか、超教派ミッションであるか。その結果としての教派形成、教会設立をみることができる。*註11

この超教派的海外宣教観は、教理、神学、教会政治などを移植するのではなく、結局は聖書を宣教することになる。教会、教団形成は生み出された群が聖書に立ってする。これを石原謙は「日本キリスト教史論」で純粋なプロテスタント宣教と云ったが、広くはC.I.M.後のO.M.F.にも通じる。事実、O.M.F.の働きによって設立された聖書教会の存在とその活動を戦後、日本の教会史の中でわれわれは見て来た。

④戦後、叙上の教団形成とは別に、バックストンの重荷と幻に立つ超教派的な働きには**本田弘慈**の日本福音クルセードがある。また、バーネットの愛弟子**羽鳥明**のメディア伝道もある。羽鳥は戦後、米国留学、滞在中、カスバルトソンと組んで、邦人伝道もしていた。日本福音同盟の設立や日本伝道会議開催で、キーマンとして奉仕した**安藤仲市**らも奥底にはバックストンやウィルクスのヴィジョンがあった。安藤は竹田らの湊川伝道館の働きで救われ、復興教会で育つ。香登修養会できよめと献身。本田は塩屋で造られる。羽鳥はバーネットの霊の子。他に**森山諭**がいるが御牧の直弟子。*註12

戦後の関西聖書神学校にしても一つの教団の御用神学校ではなく、その重荷は諸教会に奉仕することであり、またあくまでも聖書に立ち、御子によって成しどげられた「全き救い」を諸教会に証しすることにもある。聖書神学舎の設立においても、舟喜順一にしろ、沢村の二人の女婿たち、羽鳥や舟喜信一にしても、ただに姻戚関係だけでなく、あくまでも聖書そのものによって聖書そのもののメッセージを宣教し、日本の教会を建設し、諸教会に仕える目的と重荷があったのではないか。*註13

6. 英国におけるバックストン

1) ロンドン郊外ウイドベリーの生活 (1903 - 1913) *註14

2) 英国国教会によるケンブリッジのホーリー・トリニティ教会牧師就任の申し出 *註15

3) タンブリッジ・ウエルズ市聖三一教会 (ロンドンから 50 マイルほど離れた英仏海峡に近い) 牧師活動 *註16

4) 引退、ウィンブルドンへ *註17

5) 英国のホーリネス運動との関わり *註18

6) 英国におけるホーリネス運動の二傾向 *註19

7) 英国におけるバックストンの位置づけ

①云うまでもなくバックストンの位置づけは、英国国教会の福音派に属する教職であったこと。ケンブリッジの聖三一教会への呼びかけから見ても彼の立場がいかなるものであったかがわかる。ターンブリッジウエルズの牧会においても福音派の国教会牧師の姿が十分に伺える。ケズィック聖会での奉仕もホーリネス信仰に立ちつつも共に健全な国教会の牧師としての評価が伴わなければその講壇に立つことはできない。大局的に見れば、英国国教会に属し、福音派のリーダーであるジョン・ストッドらの先に立つ人々の中にバックストンもいたことになる。

②C.T.スタッドが評したように「広範で健全な聖霊観」がバックストンにはあった。フェイス・ミッション、リーグ・オブ・プレーヤーといった強力なホーリネス運動の推進者たちと深いつながりを持ち、その働きを J.E.B.と共に推進しておりながら、ケズィックの流れの中にいた。しかも、ケズィックにおいて少しも躊躇することなく、罪の磔殺を語り、聖霊のバプテスマを語り、内住のキリストを語り、また臨在の主を語っている。

7. バックストンと聖化

1) その聖化の基調 バックストンの内に燃える魂の渴望は、この神の提供する福音の最高恩寵をすべてのキリスト者に提供することであった。しかして、神の約束への「不信仰」を厳しく戒めつつ、同時に真理から逸脱する「狂信」を警戒しつつも、大胆に聖なる欲望を起こすことをまず勧める。そして、聖潔の生涯への召しはキリスト者万人に提供されるものであって、聖潔は赦罪と平和とを受けたよりも一層深い経験であること、そして、その準備と供給の全備は、十字架と復活、聖霊の降臨において完全であること、その時期と可能性は、肉体において生きている間において十分可能であり、そのゴールは三位の神との結合とその完全支配であることは、彼の『聖書的聖潔』の基調をなす。しかして、アダ

ム的な「絶対的完全」とか「誘惑にかからない完全」、「無罪の完全」や「判断に誤りなき完全」、さらには「成長なき完全」に至っては、それらと明確に一線を描く。

2) 義認と聖化 そこでまず、「聖潔は赦罪と平和とを受けたよりも一層深い経験」とは聖潔の基礎が認罪、悔い改め、十字架信仰を経て与えられる「義認」と「神との平和」を内容とする「新生」に土台し、かつ「段階的」であることを意味しよう。「段階的」とはもとより平面的にあらず、立体的であって、そもそも究極的には「義認」も「聖化」も「栄化」も三位一体的福音の恩寵である。すなわち、人間の肉の行為に破産して、ただ功なくして、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされる（ロマ 3:24）という義認の恵みは、その恩寵そのものの中に、すでに聖化の恩寵を包含している。たとえば、ローマ六章では、はやここに至って「罪に死んだわたしたち」（6:2）とさえ言い切っている。これが義認の恵みのライン上の結論であり、同時にこれは、聖書中またとない聖潔の宣言文でもある。従って、義認の恵みを「隠れ箕」として罪にとどまることは「断じて」許されない。ただ、義認というスタート・ラインに立った者が、それを口実に道德廃止論に墮さずとも、あまりの感恩の情に、知らず知らずのうちに自らの行為をもって聖化のラインに進もうとするは自然の成り行きである。しかし、この「まじめさ」は、やがて底知れない自己嫌悪に陥り、敗北的キリスト者生活を余儀なくされることもまた否定できない。ここに至って、この局面を打開するために、自らの行為から目を放って、あくまでも信仰義認の原理的立場に自らをおきつつ、肉体生活における此岸の「聖化」の完成を「あがないの日」の此岸のかなたにおいて、霊的の激しい闘争過程を経てそのゴールに向かうという立場をとるか、「それとも知らないのか」（ローマ 6:3）と今一度、千歳の岩なるキリストの十字架を仰ぎ、「キリスト・イエスにあずかるバプテスマ」の奥義に基づいて、「古き人」をキリストの十字架の事実により「信仰によって」磔殺し、その決算上の答として「罪に対して死に、キリスト・イエスにあつて生きる」との「恵みの下」の生活に入るといふ立場をとるか、道は二つに一つである。実は「水のバプテスマ」のときに、この「バプテスマの奥義」を体得することが理想であろうが、現実においては、新生の後にこの奥義の何たるかを知るに至るのが通例であろう。

3) 聖化の転機性と持続、成熟性 続いてバックストンは、漸次的聖潔と共に、この新生と聖潔が転機的な恩寵であって、かつ段階的であることを指摘する。「罪人は救いを受けられるが、聖霊を受けることはできない。」しかし、「御霊によって生まれたものは、はじめて内に住まわしめるために聖霊ご自身を受けることができる。」モールもエペソ 3:16-17 の「キリストを住まわせる」というみわざは、Ⅱコリント 13:5 の言う、新生、再創造によって神的合一に至っている者に対してなされる転機的なみわざであると言う。（H・C・G モール、『至聖所の生活』いのちのことば社・1961年、74-81頁）同様に、バックストンの、この「新生」から「聖化」への「転機」を、その約束の示す聖句で時制がアオリスト形であるという積義学的見地から証明すると共に、この問題に関する「型」（タイプ）、たとえば「約束の地に入ること」、「結婚」、「玉の戴冠」などがすべて転機的要素をもっていることから証明する。しかしまた、その型が転機的要素と共にはるかに勝って持続的、成熟的要素をもっていることを強く指摘する。聖潔の「点」は「線」の始まりであ

り、「点」なくして「線」はありえないが、「線」に行かない「点」はまた無意味である。バックストーンにおけるこの聖化の「点と線」のコンビネーションは、本質的なキリストと我らとの union と communion という極めて対神的な人格関係において発展する。

4) 聖化の消極面と積極面 しかれば、バックストーンにおいて、我らの経験できるところの「全き救い」あるいは「極端まで救う」という神の新創造のみわざとは何か。従来から指摘されているように、この恩寵のみわざは常に二つの面をもつ。たとえば「脱ぐ」「着る」、「毀つ」「建てる」、「捨てる」「得る」、「死ぬ」「甦る」、「降伏する」「占領する」などで、前者は消極面であり、後者は積極面である。そしてこの消極面と積極面は文字通り、「相対立する」が、実は後者は前者を前提とする。すなわち、前者は後者の必須条件である。ところが、後者の成就是聖潔の継続過程において、後者が生きて前者を常に前者たらしめる。その意味で前者と後者とは互いに「相協力し直結する」。実は、この「相対立し」「相協力する」という聖潔の消極面と積極面のいっさいのよりどころは、とりもなおさず、「十字架と聖霊」である。バックストーンにとって聖潔とは「十字架と聖霊」、「血潮と御霊」、「カルバリーとペンテコステ」であって、「十字架によりて」の絶対的消極と「聖霊によりて」の絶対的消極であった。それは、イエス・キリストの十字架を通しての聖霊のバプテスマによる内住のキリストの恵みで、それによって、「心と性質との内にある罪から実際に解放され、実行できる救い」となるのである。そこで、この消極面の徹底こそが積極面を開くことであって、それはみことばと御霊による内心の「探り」から始められ、その光の鋭さ、深さ、徹底さは、深刻に消極すべき「実体」を明らかにする。そして、この「実体」こそが「罪」（ロマ 6-7 章、7:20）、「古き人」（ロマ 6:6、エペソ 4:22、コロサイ 3:9）、「罪の体」（ロマ 6:6、コロサイ 2:11）、「死の体」（ロマ 7:24）、「罪と死との法」（ロマ 8:2）、「肉の念」（ロマ 8:5-8、I コリント 3:1-4）、「肉」（ロマ 8:8、ガラテヤ 5:16-21）と表現されるものであって、この「一物」が「十字架によりて」磔殺されることが聖潔の「天王山」となる。こうした魂の「取引き」は新生なき魂においては望みべくもないであろう。しかして、「十字架によりて」の「絶対的消極」は「聖霊によりて」の「絶対的積極」の新局面を開く。そして、前者を後者たらしめたとき、「あらねばならない」前者は、もはや「あつてはならない」ものとなる。竹田俊造の「我キリストと共に十字架につけられたりはきよめではない」はまさに至言である。では何がきよめか。「キリストわがうちにありて生きるなり、これがきよめ」である。これはきよめの積極面、「聖霊によるきよめ」を言いえて余りある。ここに「我の死」の意識よりも「彼の臨在」の意識の方がいよいよ鮮やかとなる。「内心の純潔、心の内の思いと動機の医癒」という根本的きよめは「神が私共を助けて、罪に勝たしめてくださる、ということ以上」の恩寵であって、内住の御霊によるキリストの内顕現を意味し、ささげた、従った、まかせた、という「我」も、きよめられたという「我」も見失って、「私のいのちは私でなく、キリスト」という証し、フル・オフ・クライスト、生ける主の合一、合体、占領という「到達点」を示している。したがって、この「聖霊によるきよめ」という根本的きよめ (radical holiness) は、肉体をもっている間に罪の根は残るが、信仰によって勝っていくという「圧迫説」 (suppression) でも、victorious life でもなく、もちろん、極端な、無造作な「根絶説」 (eradication) でもない、御霊により信仰によって、キリストの「死」

と「甦り」に結び合わされるといふ「合体説」(identification)である。昔、会見の幕屋が外庭と聖所と至聖所とに造られ、その会見の幕屋を神はその栄光をもって、満たしきよめたが、今や、神は神的栄光の総算用をもって霊と心と体の全存在、全人格をきよめ給う。バックストンの言う「至聖所的キリスト者」はここに完成する。

7. バックストーンと主の臨在信仰

1) 神との交わりにおける聖化 しかれば、きよめはもはや理論ではなく生活である。すなわち「神との交わり」である。渡辺善太氏は「松江バンド」の勝利の源泉をその「聖書的なこと」、その「教会的なこと」とともにこの「神秘的なこと」、すなわち「神との交わり」にあると言ふ。バックストーンにおいてこの交わりの模範は、キリストと「父」とにおけるそれである。たとえば、ヨハネ伝において、キリストと父なる神との交わりは、「父われと偕に在す」(ヨハネ 16:32)という「交わり」の階段から、「我と父は一つ」(ヨハネ 10:30)という「本質的結合」へ進み、さらに、「我の天の父に居り、父の我に居給う」(ヨハネ 14:10)という「完全所有」までの深さをもっている。「神のみ彼の中に生き給うた」という限度までの「神との交わり」を我らの模範とせよが、バックストンの「イミタチオ・クリスチ」の眼目である。(B・F・バックストーン・小島伊助訳『神と偕なる行歩』バックストーン記念霊交会・1955年、4-10頁)

2) 主の臨在信仰の原理 ではバックストーンにおいてこの「神のみ彼の中に生き給うた」という限度までの「神との交わり」を實際生活において「現実」たらしめ「持続」せしめる「原理」とは一体何であろうか。

①主への絶対依存 それはまず、チャールズ・ウェスレーがうたい、モールが引用した confidence in self-despairを意味する主への絶対依存である。(Moule, H.C.G., Philippian Studies, Londn: Pickering and Inglis p.162)これが「神との交わり」の根であり、「主の臨在信仰」のバックボーンである。キリストに似るとは、一体どこがどのようにキリストに似るのか。それは「祈りなくしてはやっていけない」というキリストの御姿においてであり、「神が共にいまさずば全く手も足も出ぬ程に無能なることの認識」においてである。(バックストーン『前掲書』4頁)この「無能なる認識」すなわち、キリストの essential weaknessにおいて、我らはキリストに似る。バックストンの旧新約にあらゆる「聖書講義」とその「説教集」及び「小冊子」の全巻に底流する主旋律はこの徹底した confidence in self-despairである。もとより、マーレーも、我らが「キリストの如く」なることを一点にしぼっている。彼はこのキリストの humiliationを贖いの根底にとらえ、キリストの humiliationは我らの salvationとなったが、しかして、彼の与える salvationとは我らが彼の humiliationになることであると言ふ。(アンドリュー・マーレー『謙遜』いのちのことば社・1967、10頁)バックストーンによれば、サタンの主イエスへの誘惑に対する勝利は「人の子」として神に絶対依存することにあつた。キリストが「人の子」として「からだを備え」られたのは、「御旨を行うため」(ヘブル 10:5, 9)であつて、我らの「キリストのまねび」もここにある。「わが霊によるなる」との主の「みことのり」の前に、個人的力量も団体的勢力も、すなわちいっさいの「肉の頼み」を投げ捨て平伏する「真の割礼者」たち(ピリピ 3:3)によ

って、「日本伝道隊」(J.E.B.)創設され、ゼカリヤ四：六はその標語となった。「もしあなたが一緒にいられないならば、わたしたちをのぼらせないでください」(出エジプト3:15)との絶体絶命のモーセの「本質的弱さ」があつてこそ、「わが臨在汝と共に行くべし」(同 33:14)は輝き、主の伴侶と保護は現実となった。「我らの戦闘力は、第一に我らの無能、第二に主の大能」という笹尾鉄三郎のことばは、これらの真理を言いえて余りがある。人間の誉れを「断固」断り、この世の助けを「断然」退ける厳しさと鋭さの中に、日本における J.E.B.も中国における C.I.M.も存在した。しかして、その「信仰の報酬」は近世の宣教活動の分野において「奇跡的」である。(「中国内地伝道会」の根本原則や伝道方針は石原謙の『日本キリスト教史論』で詳細に記述。日本伝道隊のそれと比較するとき、両者はほとんど同一。石原はただ信仰のみにより宣教を進めた中国内地伝道会の働きは「奇跡的」と云っている)

然り而して、これは個人的聖潔のプリンシプルであると共に、「教会」のプリンシプルであつた。その政治体制がいずれであれ、「キリストが教会の首」となり「召されたる者」の中に臨在されるというこのプリンシプルが生かされ、西洋のキリスト教の教派的教会を輸入するのではなく、その国の国民によってなる純然たる教会を、聖書及び靈的基準にしたがって築くという、「純日本的教会」の形成をバックストンもウィルクスも幻を見ていた。今日、この線に従つて、教憲・教規が具体化され、設立されるに至つた「日本イエス・キリスト教団」のもつ歴史的意義は大きい。

②敬虔の修行 バックストンにおいて、「神のみ彼の中に生き給う」という限度までの「神の交わり」を現実たらしめ持続せしめるもう一つの原理は、神の臨在を不斷に現実たらしめるところの「敬虔の修行」である。たとえば、バックストンはコロサイ三章五節以下を註解して、「だから地上の肢体を殺しなさい」を「何だ、私どもはもう死んでおると思った、と彼らは言うかもしれない。そうです、死んでおるから殺すのです」。(B.F.バックストン、『神の奥義なるキリスト』バックストン記念霊交会・1966年、56頁)これが聖書的、福音的な「敬虔の修行」である。キリストと共に割礼され、よみがえつた者は、地にある肢体・肉体の欲を殺しつつける「死の場所」を知っている。コロサイ書二章から三章にかけて連続する「キリストと共に」(2:13,20 3:1,3,4)は、キリスト者の原理的立場である。すなわち、キリストの生・死・復活・昇天・栄光顕現という「キリストの事実」に「共に」と「信仰によって」あずかり、しかして我らが生かされ、殺され、甦り、神のうちに隠れ、やがて栄光のうちに現れるという、過去・現在・未来における我らのキリスト体験が続く。この「キリストと共に」のあがない体験、煎じつめれば「磔殺と聖霊」の体験が確實であるときに、地上の肢体を「聖霊によりて」(ローマ 8:13)殺すことができ、肉体の欲を「聖霊によりて」常に「死の場所」に保ち続けることができる。バックストンは、神との交わりを保ち、深めるのにいかに注意深くあつたか、憂えしめざる聖霊の臨在に対していかに注意深くあつたか、神と人との愛の中がいかに新鮮に生きていたか。実にバックストンをバックストンたらしめた秘訣はここにあつた。バックストンはペンテコステの恵みに生きた。それは「常に主をわたしの前に置く」(詩 16:8)ことなくしてありえない。

3)信仰の報酬 バックストンをバックストンたらしめたのは理論にとどまらない、この信

仰生活であった。それは、礼拝と祈禱における生ける主との交わりであり、絶えざる主の臨在の輝きであった。内村鑑三して「人類の華」と叫ばしめ、中田重治をして「見せるきよめ」と言わしめ、竹田俊造をして「きよめはイズムでなくペルソナだ」と直感させたその人格と生涯と奉仕は、彼の「信仰」への主の「報酬」ではなかったか。「神は今日、我らをいかなる人物になし得たもうか。バックストンの生涯にその答がある」（『信仰の報酬』、9頁 ゴッドフレーはソファーに身をあずけ安息する行為を見せて、このように主に委ね、任せ、安息するその「信仰」に主は「報いられた」。父の人格も働きもすべてが赤子のように委ね任せる信仰の産物だ、と語られた。だから、同様に、今も、バックストンをバックストンたらしめた主は変わり給わないゆえに、その同じ信仰に主は同様に報われるとも語られた）

5) 教会史的意義

以上が、バックストンをバックストンたらしめ、松江バンドを松江バンドたらしめた聖潔の恩寵である。

①それは、聖書的といったが、聖書の部分的恩寵ではなく、聖書全巻に満ち満ちている約束に基づくものである。

②この十字架と聖霊を土台とし、最終的には神との交わりに至らしめる聖化の恩寵は、真の福音をして福音たらしめた。実に彼らの超教派性はこの「全幅的福音」(Full Gospel)とそれを「受容すべき教会」とに対する切なる重荷が源となっている。

③それは日本における宣教の次元を高め、その目的とその方法をよりいっそう純粹化してきた。そしてこの「全幅的福音」は、今後の日本における教会の福音理解とその宣教の目的と方法とを本質的に問いかけ続けるであろう。

④それと共に、この流れの世に現れた歴史的経緯もさることながら、今、現にこの「神と小羊との御座」から流れる天来の「聖霊の大河」に直接あずかるとき、実はそれこそ松江バンドの流れにあずかることになり、その生命的、本質的「信仰」に対する「報酬」は、今後も続いて与えられる。

⑤聖書神学的、かつ近世宣教史の視点からしても「聖化と宣教」は不可分。「見神」(ヴィジオ・デイ)は「神の宣教」(ミッシオ・デイ)に直結しており、聖化をぬきに宣教はなく、宣教に至らない聖化はない。また、聖化は宣教の目的であるばかりか、何よりも聖化は宣教の手段。ここにダイナミックな聖化論がある。

*** 註1 ハンドレー・モール Handley Carr Moule(1841-1920)**。ダラムの主教。リドレー・ホールは 1881 年設立。エヴァンジェリズムの代表的指導者。新約聖書注解にパウロの獄中書簡、ローマ書など。塩屋（関西聖書神学校）では小島伊助がこれらを愛用。ケズィック聖会のプロモーターの一人。エペソ書 3:14 以下の内住のキリストに関する黙想に『至聖所の生活』（いのちのことば社・1961 年）がある。ムーディのケンブリッジ伝道の推進者。

ウエストコット Brooke foss Westcott (1825-1901)。ダラムの主教を歴任。F.J.A.ホートとの共著校訂の新約原点研究 The NT in the Original Greek (2巻、1881)は画期的。新約の注解にヨハネ福音書(1881)、ヨハネの手紙(1883)、ヘブル書(1889)などがある。バックストンの聖化体験のテキストはヘブル 10:19 から。

*** 註2 ウェブ・ペプローの説教とエルウイン・オリファントの証しは導いて「ウエスレーのうるところのホーリネス」とゴッドフレーは言及。**ゴッドフレーはウェブ・ペプローやオリファントについて立ち上ったことに言及していない。ただ、ウェブ・ペプローはケズィックの推進者、指導者としてウエスレアンと一線を画す。ウエスレーの罪の概念については強く批判。一方、オリファントは、ポロックの「ケズィック物語」によると、ケズィックの教えを強く反対。信仰者における罪の根絶(eradication)を主張。(The Keswick Story p.64) 神学的には穏健カルヴィン主義的なウェブ・ペプローでも、無罪完全説的なオリファントでもない、「ウエスレーのいうところのホーリネス」は意味深長。ゴッドフレーは『信仰の報酬』の序文で、「しかし、私は、私も同様、父がクリスチャンは罪を犯すことの出来ない恩恵の状態にまで達しようという非聖書的な教義を抱いていたと思われたくないのである。しかし、『人もし罪を犯さば』と、罪を犯した場合の備えがなされているようであるにしても、心許して『罪の中に留ま』って、おちつきこんでしまっはなるまい」と記している。(同書、11、12 頁)

*** 註3** この日本宣教の重荷とビジョンは、後の日本伝道隊、さらに日本イエス・キリスト教団の核心となっている。同様のラインで、現実に日本伝道隊の働きから生み出された諸教会が「日本イエス・キリスト教会」として設立していく過程でウィルクスも記している。これは、日本におけるウィルクスの最終局面(1932 年)の記述。E.W.ゴズデン著『燃える心の使徒パゼット・ウィルクス』(いのちのことば社、1971 年、168-169 頁)

「真の宣教の終局の目的は、決して西洋のキリスト教の教派的教会を輸入してその国に建てることではない。その国の国民によって成る純然たる教会を、聖書および霊的基準にしたがって築くことを奨励するのである。このようにしてできた独立教会は、だんだんと寄り集まって群をなし、やがて大リバイバルの日には、みな合同して、一つの純日本的教会を形成するであろう。今までに、二十六の教会から成る『活水教会』の群れがある。他に、『復興教会』という群れもある。現在多くの農村に伝道所を持つ三十の群れが、日本聖書教会を形成している。この聖書教会は、神戸地方の群れであって、伝道隊が他を助ける団体であるという主義を捨てずに協力できるよう、次々と生まれて来る独立教会を吸収する目的を持った教会である。こうした群れは、みな日本伝道隊の働きの実である。伝道隊の働きはまだるつぼの中で形作られつつあるのだ。また我々の教会形成の方法が他の目に不満であっても、福音未伝地に対する信者や教役者の伝道熱があまり盛んなので、それを引き止めておくわけにいかないのである。我々の前進に伴って、神はこのようにしてすなごった群れを守る手段を与えてくださることを信ずるものである。伝道隊の日本人隊員は、この新戦術に非常に熱心である。」

*** 註 4** バックストンは C.M.S.の所属の宣教師であったが、伝道費はバックストン家が負担。バックストンとそのスタッフに与えた「任命書」には純粋なプロテスタントミッションの精神がにじみ出ている。

(『信仰の報酬』68、69 頁) C.M.S.とバックストンとの間には、個人の働きが英国においてのように英国教会を回心者たちの上に押しつけることなく、その国に最も適したように教会を建設することと、バックストンか他の教派において自由に語るることについて、双方の間で確約されていた。(同書、75 頁)したがって、日本においてバックストンが聖公会以外のところで語ることや、他派(この場合、長老派のウィンド氏)の宣教師を松江に同行することや、「聖潔」のメッセージを語るることについて、現地の監督からクレームがつけられたとき、彼は英国の C.M.S.のあり方と現地の日本聖公会のあり方の間に基本的な相違のあることを感じとっている。バックストンにおいてこれらは大きな問題であったが、結局生涯彼の超教派的立場をくずさず、同時に英国国教会教職として、その責任を全うしたことは注目に価する。

*** 註 5** 1942 年、すべての宣教師が日本を引きあげた時、日本人クリスチャンたちを建て上げ、主な働きの責任を取らせ、教会財産を彼らに所有させた宣教方策がいかに賢明であったかを歴史が実証している。

*** 註 6** ゴッドフリーは、バックストン宣教をローランド・アレンの「聖パウロ及びわれらの宣教方法」の類似性を認める。しかし、アレンの書が宣教団体に感激を与えたのはバックストン宣教 25 年。Allen, Roland Missionary Methods: St. Paul's or Ours? (Wm. B. Eerdmans Publishing Co. Grand Rapids, Michigan) は All Nations Christian College の必読書。

バックストンは聖書の叙述に立って自らの救いにおける方法を明確にし、宣教においてもその方法を聖書そのものから学ぶ。

- 〈1〉キリストを信じる信仰による救いの宣伝。
- 〈2〉回心者たちに心と生涯と純潔の必要と方法を示す。
- 〈3〉聖霊とその働きについて悟り、立証を奨励。
- 〈4〉彼らの中から指導者を立て、自らは退く。
- 〈5〉訪問、書簡などによる交わりを持続し、霊性の完成へと導く。(『信仰の報酬』91 頁)

*** 註 7** 日本におけるホーリネス運動の濫觴。1895 年(明治 28 年)には、京都の博覧会伝道をきっかけに嵐山において「小さき群」が中心となり、米国からウースター(ヘブシバ・ミッション)を招き、5 月 10 日-17 日、聖会を開く。これは日本における最初の聖会と言える。第 3 回聖会后、神学、信仰、実際伝道にいきづまった彼らは、バックストンの招きで松江へ。(都田『バックストンとその弟子たち』146-164 頁)

*** 註 8** しかして、毎月十五日、三十日には、なにかしらの金を状袋に入れ『これは神様から下さったものです』と言って、それらの人々にわかち与えていた。そこに来る人を拒まずだれをも喜んで迎えたので、彼の所にはほとんど入れ代わり立ち代わりいつも五、六十名から百名くらいのいわゆる修養生が絶えたことがなかった(都田『バックストンとその弟子たち』166 頁)

*** 註 9** ニュアンスとして中田にはホーリネス信仰により天下を奪取の気概。日本のみならず、東洋をも射程距離に置いて。日本伝道隊には天下を捨てる、自らを隠すの精神。中田らから、「殿様信仰、おぼっちゃま信仰」などと云われたとか。その中田に笹尾を送ったバックストンは流石。笹尾なきあとの中田を思えば。

*** 註 10** 「日本伝道隊の目的は、もろもろの福音的教会を助けて、未信者のため伝道会を、信者のため聖別会を開き、もって全き救いの福音を宣伝するにあり。しかして、かくの如き働きをなす真意は、すべての主の民が宗派的束縛に拘泥せず、相結合に至らんことなり。このゆえに、いっさいの教会政治の責任

は、これを彼らに放任し、実効的方法において、キリストのからだ、すなわち、一つの霊なる見えざる真の教会の建設を助成せんと欲するなり。」綱領中の「教理」の項に「キリストにある真正なるすべての信者の一致、この一致が、一致せる交わり、奉仕、および祈禱によりて实际的合一に推進せんことを求むるなり。」（都田『バックストンとその弟子たち』214頁。都田は由木康の「世界教会運動の先駆者」（『バックストン先生の思い出』2号）から引用。古い文字、用語は現代的に）。なお、由木康の父虎松は境港で竹田俊造に導かれ回心。赤山聖会にも出席。日本聖公会員に。日本伝道隊が組織されると入隊、神戸へ。康自身、年会、湊川伝道館、神戸聖書学校で指導にあずかる。『バックストン先生の思い出』1号、14頁）英国における日本伝道隊結成期には、バックストン、ウィルクス、ハーバート・ウッド夫妻のほか、Albert Head (Chairman of Keswick)、J.G.Govan (founder of the Faith Mission)、Miss Gurney (of the International Police Association)、W.Thomas Hogben (of the One by One Band) の名が連ねられている。The Oxford Dictionary of The Christian Church の WILEKS、PAGET (1871-1934) の項では、・・・Here he formed the idea of a Japanese Evangelistic Band (J.E.B. Japanese は Japan の誤記) which, free of ecclesiastical organization, would be directed towards aggressive evangelism and the spread of Scriptural Holiness; and in 1903 the J.E.B. was established under the name of the 'One by One Band' of Japan, with its centre at Kobe.

1950年改訂の英文の Constitution と Policy を見ると、Theaching の第3、4項は以下のごとし。

Third: A full salvation and separation unto God, and a true union with Him through faith in our Lord and Savior Jesus Christ. To this end it emphasizes Entire Sanctification as a work of grace in the heart of the believer (I Thess. v,23, Romans vi,6.10-13) . The embraces heart cleansing (Acts xv,9; I John 1,9) , the fullness of the Holy Spirit (Eph. iii,17) and the perfecting of holiness in the fear of God (2 1 Cor.vii,1).Fourth:The unity of all true believers in Christ.

最近、邦訳された、E.W.ゴズデン著『火を取れ』（ウィルクスの後を継いでJ.E.B.の主幹となったジェームス・カスバルトソンの伝記）には、日本伝道隊が起こされる頃のバックストンの三つの重荷が記されている。

（1）最も頹廢的な罪の奴隷を救い、彼を暗黒からまぶしい光の中へ連れ出す救済の必要性。（2）若い回心した人を引き上げて、他の人に証しをさせ、伝道者にさせる聖霊の力の必要性。（3）全ての中で最も大きな必要は、ペンテコステの力で福音を語る聖霊に満たされた伝道者の出現であった。日本にとっての大きな必要は、ウェスレーであり、ムーディであり、トーレーであった。

***註 11** 思えば、バックストンの日本における生涯の働きの理想的、また聖書的結果として彼らは何を想見していたか。それは「最も願わしく思われる事は、我らの宗派のどの線にも従わず、すべての日本人クリスチャンを一つの会衆に結合させる日本人教会があることである。」この壮大な幻の規模はともかく、少なくとも英国国教会はもとより「我らの宗派のどの線にも従わず」という質において、そのヴィジョンの摂理的具現をこの教団に見る。ウィルクスも同様の幻を見ていた。「真の宣教の終局の目的は、決して西洋のキリスト教の教派的教会を輸入してこの国に建てることではない。その国の国民によって成る純然たる教会を、聖書及び霊的基準にしたがって築くことを奨励するのである。」

***註 12** 戦後、日本各地の聖会や修養会は重荷を持つ者たちもバックストンから見れば第二世代、第三世代に属する者たちである。日本にケズィック聖会を呼び込んだ者たちは、東京での「バックストン聖会」の主催者たちであった。その当時のケズィックの議長キャノン・ホートンはかつてバックストンの下で副牧師をしていた。ピリーグラハム国際大会の推進者たちもやはりバックストンの重荷を受け継ぐ者たちであった。文書伝道、とりわけ霊的機関誌月刊「福音」は500号に及び、小島が主筆としてこの信仰の流れを静かに深く豊かに流し続けて来た。沢村の筆も常に「福音」にはあった。また舟喜ふみの筆も読者たち

を魅了した。

***註 13** これについて戦後間もなく発表した沢村の「主流的キリスト教」（月刊「福音」44号所載、沢村五郎『大いなる救い』いのちのことば社、1968年、54頁）は戦後の主流的キリスト教のあり方を示している。第1は、あくまでもキリストに直結した「日本の教会」。第2は、学説至上主義や聖書の特殊な解釈を土台とするものを排除した「聖書そのままの宗教、使徒直伝の宗教」。体験や、感激、感情に依存することも危険。「真理のことばこそ、唯一の信仰の土台」。第3は、キリスト教教義の内容は豊富。ルターの信仰義認、ウェスレーのキリスト者の完全など、その時代はそれを要していた。しかし、現代日本は福音の未伝地、キリスト教の原理をことごとく教え込む必要がある。ただ、日本の道徳的水準の低劣ぶりを見ればキリストの聖化する贖罪の血の力は、最も強く叫ばねばならない。ただ、いわゆる聖潔派の批難される理由の二つを心せよ。一つは、教義の説き方のずさんさ。体験のみの強調で、きよき生涯の結実に欠ける。この点、バックストンに学べ。第4は、各人におのおの特色あり。教会に特殊性あり。他を尊重し、相提携せよ。ただこれらは支流。すべての支流は本流に合流を。かたよらず、欠点を排除し、冷静な頭脳と燃える心、おごそかな礼拝と熱烈な伝道、平易な福音宣教と深い教養、煮え返る感激と平静な行動、真理への忠誠とその包容力など。決して両立しえないものでない。これが我らの追求すべき「新日本の主流的キリスト教」である。

***註 14** 松江バンドの形成は10年余り。家族を引き連れて帰英。自分の祖国とも思われる日本の救霊、伝道と子女の教育をどちらを優先させるか。宣教師にとっては常に最大の課題。しかし、バックストンは父親の果たす役割として宣教地のゆえに家族を犠牲にさせず、子女の教育を優先。と同時に日本宣教の重荷、働きは新しい形で継続。1903年、日本伝道隊結成。ウィルクスを日本における主幹とし、彼はJ.E.B.の総理として生涯重荷をもつ。4人の息子はいずれも宣教の働きに。ただ、ジョージはバックストンが日本に滞在中（神戸時代）、第1次世界大戦で戦死。長男マーレーも神戸時代、父の働きを助けるため訪日。次男アルフレッドは宣教界の雄、C.T.スタッドと共にアフリカ宣教。スタッドの娘と結婚。悲しくもこの二人も第二次世界大戦中、ロンドンで宣教のことを語りあっていた時、ドイツの爆撃にあい逝去。四男ゴッドフレイは大戦中重傷を負い、片足の機能を失い、ステッキ生活。ロンドンにM.T.C. (Missionary Training Colony) を起こし、校長に。当時、父バックストンもここで聖書を講じる。その当時の学生に1昨年召されたスティーブン・オルフォードがいる。ゴッドフレイは父から引継ぎ、J.E.B.の総理に。また、オールネイションズ・バイブル・カレッジ（男子のみ）をサポート。学校をイスニーの旧バックストン邸に移転時に多大な努力。やがて1970年に入り、これとマウントヘルモン・バイブル・カレッジ（女性のみ）、リッジランド・バイブル・カレッジ（女性のみ）が合併してAll Nations Christian Collegeとなる。イスニーは森と丘の広大な敷地。今日、ヨーロッパにおける最大の宣教師養成学校。バックストン卿ハンナ・バックストンは、バックストン邸がイスニーに建てられた時、孫頭のヘンリーに、やがてこの館が世界宣教に奉仕する神の僕たちのために用いられるという手記を書き残していたが、その幻が成就したことになる。

ウイドベリーの期間中、バックストンは1905年（明治38年）、1908年（明治41年）、1913年（大正2年）と3回にわたって日本を訪問。この3回目は、1913年から1917年（大正6年）に及ぶもので、日本伝道隊の神戸時代、前記の第2世代の弟子たちを養成することになる。この間、バックストンは、日本伝道隊の総理として現地日本と連携、宣教師派遣者側の総責任をもつ。英国内にJ.E.B.の多くのプレイヤーサークルが起こされる。また、イギリス国内の伝道にも尽力。また、オーストリア、エジプト、スイス、アメリカ西海岸へも旅行。

J.E.B.はロンドンに本部を置くものの、南アフリカ、オーストリア、米国、カナダなどにも支部を置い

て活動。ウィドベリーのバックストンは、子女の教育と宣教師派遣団体(英国 J.E.B.) の総責任者として活動したことになる。宣教界で奉仕する様々な人々がウィドベリーを来訪。アフリカ大陸からの監督、救世軍司令官(バックストン、石井十次、山室軍平との関係は山室軍平『民衆の聖書』3の山室民子の解説参照)、C.T.スタッド夫妻ら。日本からは笹尾、堀内、永野ら。堀内の英国滞在中、慶応出の実業家を目指す青年野畑新兵衛が救われ、献身。神戸、平野の聖書学校へ。戦後、野畑は安藤らと共に日本同盟基督教団で奉仕する。家庭人バックストンを見るには、ウィドベリーの生活は最適な資料。(これについては『信仰の報酬』186頁以下。『バックストンとその弟子たち』234頁以下。)

*** 註 15** バックストンは正に 52 才。最も油ののり切った年齢。聖三一教会は C.I.C.C.U.にも用いられている福音主義に立つ教会。かつてはチャールズ・シメオンも牧会。学生と海外伝道の精神を与えるためにも重要なポジション。友人 C.T.スタッドは強く受諾を勧める。スタッドの手紙は『信仰の報酬』226-227頁。要約すると、「全世界の教化においてケンブリッジはその働きの源泉。宣教師の経験ある牧師は学生に大きな感化。『次の次代を担うべきこれらの若者たちにあなたが今日まで学びかつ堅持する程の広範な「聖霊観」をもって烙印し得る人物を私は他に知らない』。もしケンブリッジに赴くなら、世界は生命の糧にありつく機会を持つ。日本はあなたのイサクである。今は献ぐべきである」。しかし、バックストンは結局ケンブリッジには行かず、日本へ。結果的には、神戸の聖書学校には前記の沢村、小島、佐藤、柘植、舟喜、野畑らが待っていた。

*** 註 16** 61 才から 75 才まで 14 年間牧師生活。主日礼拝のほかに、若者、知識人を中心とした毎週の聖書研究会、各教派間の親交、地域社会への開放。また聖三一教会は教区教会 (Parish Church) であったので、地区の学校とも直接に関係をもった。タンブリッジ・ウエルズの「牧師生活」(1921-1935) については『信仰の報酬』257頁以下。

*** 註 17** 1935 年(昭和 10 年) 聖三一教会退任。ロンドン郊外ウィンブルドンへ。ゴッドフレーが校長である M.T.C. やバックストン家と親類のフッカー元校長のリッジランド・バイブルカレッジで定期的に講義。そして、1937 年(昭和 12 年)、最後の日本訪問。この時期、バックストンに関わる一つのエピソードをジョン・ストットは記している。バックストンが週に 2 回、整骨院に通っていたとき、係員がエレベーターを上りくだりするバックストンのお世話をしていた。ある日、彼は整骨療法士に「あの老紳士はどういうお方ですか」と尋ねたという。療法士が「どうして?」と聞くと、「あのお方といるだけで自分がどんなに腐った人間であるか知らされます」と答えたという。ストットは聖霊の最初の働きは罪のコンヴェクションを与えることを説明する中でこの例話を用いている。(Stott, Jhon, Our Guilty Silence, The Church, The Gospel, The World. Christian Foundation 20, Hoder and Stoughton, p.101)

*** 註 18** 英国における Holiness Movement については超教派で働きが進められたものに、Keswick Convention (1875)、The Faith Mission (1886)、The Star Hall Manchester (1889)、The Pentecostal League (1891) などがある。

Keswick Convention については、百周年聖会でピリー・グラハムが核心をついたメッセージをしている。Daily Thoughts From Keswic (A Year's Diary Readings) の 1 月 1 日の霊想にはその一部が紹介されている。1874 年 Scriptural Holiness を推進するオックスフォード集会で語る Evan Hopkins の a seeking faith と a resting faith の相違のメッセージから、バタスビーは主に全く委ね安息する。この「安息する信仰」により深い恵みを得た Canon T.D. Harford-Battersby (ケズィックの聖ヨハネ教会牧師) が呼びかけ、1875 年からイングランド北部の湖沼地帯ケズィックにおいて毎年 7 月開催。バイブル・リーディングを中軸に一週間にわたり毎日数回の聖会。最後は宣教聖会と 5000 人以上の聖餐式。かつては大天幕で。ケズィックは神

学的よりも聖書的、教理的よりも実際の、排他的でなく包括的（どこが違うかを強調するよりもどこが同じかを強調）、**All One In Christ Jesus**（ガラテヤ 3:28）がモットー。1週間のプログラムは130年不動。聖会の流れも、キリスト者の罪、聖め、聖霊の満たし、献身で今日まで一貫。バックストンの師ウェブペロー、監督モールも長年奉仕。福音的国教会はじめ、非国教会福音派のバプテスト派、会衆派、組合派、救世軍にいたるまで一つに集合。**Andrew Murray, F.B.Meyer, Campbell Morgan, Griffith Thomas, Graham Scroggie, Charles Inwood, Paul Rees, Alan Redpath, Stephen Olford, John Stott, Alec Motyer, Eric Alexander** など枚挙に暇がない。ケズィックの説教者として、日本には大正年間、2度にわたり **Charles Inwood** が来日。小島、車田らの通訳で有馬、箱根ほか全国各地で奉仕。一つのリバイバルの火が投じられた。

バックストンとケズィックの関係は、ウェブペロー以来深い。日本からの第1回休暇の時にも宣教会でソロスピーカーとして奉仕。その後、在英中何回か奉仕があった。少なくとも1910年(明治43年)と1923年(大正12年)にケズィックの講壇に立っている。

1910年(明治43年)の時は、**Evan Hopkins, Webb-peploe, F.B. Myer, Campbell Mogan, Griffith Thomas** とも講壇に立っている。古き良きケズィックの時代といえるか。そうそうたる顔ぶれ。ここでバックストンは 'The Secret of Victorious Power' と題して使徒行伝 1,2 章から、聖霊のバプテスマについて 'Filled with that Blessed Brightness' と題してエゼキエル書、ヨハネ福音書から鋭い罪の指摘と十字架による磔殺を語っている。コロサイ書 3 章から、**Bishop Lightfoot** の訳を提示しつつ "Slay them at a stoke" "Slay utterly" と「地上の肢体を一撃のもとに、完全に殺せ」と迫っている。

1923年(大正12年)のケズィックには、**チャールズ・インワード** や **グラハム・スクロギー** と講壇を共にしている。バックストンは、ヘブル 4 章から 'In the Way of Rest' と題して、神が備えられた輝きに満ちた安息の生涯について語っている。また、ロマ書 6 章から 'Walking in Newness of Life' と題して、罪と死の法則からの解放と「いのちの新しい生涯」を鮮明に語っている。さらに、ヨハネ 20 章 19-22 節を通して、"Jesus in the Midst" と題して真ん中に立たれる臨在の主を語っている。最後に、詩篇 132 篇から、'The Place of God's Rest' と題して、驚くことに神ご自身が我らを安息所とされることについて語っている。(以上の説教は、The Keswick Week, 1910, 1923 所載)

The Faith Mission は 1886 年、**J.G. Govan** によって創設。超教派の信仰団体で文字通り、フェイス・ミッション。その奉仕、働き全てが「信仰のみ」。人工的訴えや工作は全くない。今日も全英にその影響を与えているが、とくに、スコットランド、北アイルランド、北部イングランドが活発。**Pilgrims**(巡礼者)と呼ばれるフルタイムの伝道者による開拓伝道、巡回伝道、**Full Salvation** を強力に進める聖会。とくに北アイルランド、バンガーにおける聖会には1万を超える会衆が会場を満たす。エディンバラにフェイス・ミッション独自の神学校があり働き人を養成。バックストンとガヴァンのつながりは深い。日本伝道隊のほとんどの宣教師はエディンバラで学びと訓練を受けて来た。

The League of Prayer (Originally Pentecostal Mission Prayer Union)。この「祈禱連盟」は **Anglican Layman** で王室の教育にも責任を負う **Reader Harris** により 1891 年設立。この連盟に参加している会員たちは日々三つの目的をあげて祈る。第1に、すべてのキリスト者に聖霊の満たしを、第2に、諸教会にリバイバルを、第3に、全世界に聖書のホーリネスの浸透を。19世紀の終わりには全英に1500ものセンターがあった。スウォニックにおいては活発な聖会開催。

バックストン及び **J.E.B.** と **リーグ・オブ・プレイヤー** とのつながりは強い。スウォニック聖会は **J.E.B.** と合同で開催され、バックストン、**ウィルクス**、**カスバルトソン** らが説教している。個人的には、バックストンの四男、**ゴッドフレー** は **リーダー・ハリス** の娘 **ドロサ** と結婚。前記のように **ゴッドフレー** が **C.I.C.C.U.** の責任者であったとき、**ドロサ** は女子学生のため **C.W.I.C.C.U.** を起こしている。

The Star Hall Manchester は Fransis Crossley (1838-1897) により設立された。Star Hall Holiness Convention を開き、ホーリネス運動を推進。Clossely のほかに、J.G.Govan、Reader Haris、Thomas Cook など奉仕。ウィルクスは Crossley、Govan、Haris からの非常に強い影響を受けている。この運動はその後、Salvation Army に引き継がれた。

***註 19 ①ジョン・ウェスレーとジョン・フレッチャー** フレッチャーはウェスレーの愛弟子。ウェスレーの聖化論の弁証者であり、立証者。シュロップシャイヤーの聖徒。ウェスレーに期待されつつもウェスレーに先立って御国へ。彼の聖化論の特質は聖霊のバプテスマ論。ウェスレーの云う「キリスト者の完全」を「聖霊のバプテスマ」に結びつけた最初の人。19 世紀に入ると全き聖化は聖霊のバプテスマとして受け取られ、その転機性、瞬間性が一層強調される。

フレッチャーは神の救いの歴史（ディスペンセーション）の枠組で、聖霊のバプテスマを考察。創造者（御父）、贖罪者（御子）、聖め主（御霊）の救いのディスペンセーションにおける働きを個人の救いの秩序に適用。この枠組自体、ウェスレーのオールド・サリュティスでいう、聖霊による先行恩寵、新生、全き聖化と同じ。ただ、フレッチャーは聖霊のバプテスマを新生に続くものと位置づけるが、ウェスレーにおいては同意できない。ウェスレーは新生時において聖霊を受け、全き聖化時において聖霊に満たされるとする。ウェスレーのいう新生時における聖霊の授与の見解に関してはカルヴァンの。この点におけるウェスレーとフレッチャーとのディスカッションはウェスレーの手紙その他で入念に触れられている。フレッチャーは、聖霊のバプテスマを「火のバプテスマ」として徹底して聖化に結びつける。宗教改革の伝統に立つ者が「罪の中における救い」（Salvation in sins）を云うのに対して、徹底した「罪からの救い」（Salvation from sins）を説く。ウェスレー、フレッチャー以後、ウェスレイズムにおける聖化概念の二傾向は、Adam Clarke と Richard Watson。前者は聖化の瞬間性を後者は漸進性を強調。

②19 世紀になると信仰復興運動は**ホーリネス運動**と密接に結びつく。救世軍のウィリアム・ブース、大衆伝道の D.L.ムーディー、C.I.M.のハドソン・テラーらはいずれも聖化の信仰と生活、奉仕に生きた。直接的に聖化を宣証した者たちに、P.パーマー、D.スチール、A.マハン、O.チェンバーズ、J.A.ウッドらがいる。19 世紀のホーリネス運動の特質は、概して、ウェスレーの云う「キリスト者の完全」は「聖霊のバプテスマ」において成就するとして聖霊のバプテスマを強調。また聖化の瞬間性、罪の根絶性、体験性も強調される。ただ、その体験が聖化への近道や一定の道に図式化され、短絡的で軽薄な体験主義に陥る危険性もあった。

③20 世紀に入ると聖霊のバプテスマ論は次第に聖化の枠から離れ、聖霊の賜物、力に強調点に移る。第一波のペンテコステ運動、第二波のカリスマ運動、第三波の力の伝道などがそれ。異言、予言、いやし、悪霊追放など聖霊の賜物・力・不思議なわざ、また霊の戦いなど、聖霊の働きを宣教の領域において求める。しかし、教会の表面上の活性化の反面、混乱や分裂の危険性もはらむ。今日ほど、聖書的聖化、父の約束としての健全な聖霊のバプテスマの祝福が真に求められる時代はない。

④**英国におけるホーリネス運動**において、前期のフェイス・ミッション、リーグ・オブ・プレイヤー、マンチェスター・スターホールなどとケズィックとの間には一線が画されていた。ケズィックはもとより、教理、神学のステートメントは持たず、聖書講解が主。説教者によって聖化のとらえかたが異なる。古きケズィック時代と今日でもかなり異なる。説教者の神学的背景、教派的背景は異なるが、「キリスト・イエスによって皆一つ」が標語。ただ、特質とすれば、ケズィック特有の用語に「対抗、中和説」（Counteraction）がある。信仰によるキリストとの合体説とも罪の圧迫説とも見られる曖昧性が潜んでいる。従って、ガヴァン、クロスレイ、ハリスなどはケズィックとは距離を置いていた。